

天理大学公開講座

創刊号

2001

TENRI UNIVERSITY

目次

1. 『天理大学公開講座』の創刊に当たって.....	天理大学長 橋本 武人	2
2. 第1部		3
天理大学公開講座（大阪：毎日文化センター）記録 平成5年度（1993年度）～平成9年度（1997年度）		
3. 第2部		9
天理大学公開講座（天理市）記録 平成7年度（1995年度）～平成9年度（1997年度）		
4. 第3部		13
天理大学公開講座（天理市）講演要旨 平成10年度（1998年度） 総合テーマ：世界の文化と日本の文化 - 海外の人たちによる文化比較 -		
第10回 日中における文化交流史.....	徐 興慶	14
第11回 日本の影響を受けたブラジルの野球.....	Reimei YOSHIOKA	19
第12回 これからの日独関係.....	B . U . カルステン	23
	(訳) 中川 義英	28
第13回 タイ文化と日本文化.....	チョ - ティロット K	32
	飯島 明子	42
5. 天理大学公開講座（天理市）の統計資料		48
受講後のアンケートから		
6. あとがき.....		49

『天理大学公開講座』の創刊に当たって

天理大学長 橋本 武人



天理大学公開講座委員会では、これまで続けてきた「天理大学公開講座」の成果を一度まとめてみることにになりました。将来のさらなる発展を期するために、過去を振り返ってみることは大いに意義あることであり、まことに喜ばしく思います。

大学は教育研究の場ではありますが、今日の大学は、かつて象牙の塔と評されたような没世間的な集団ではありえず、その地域の文化創造の中心として、社会に開かれていなければなりません。社会に開かれた大学の在り方には多様な側面があるでしょうが、ここで取り上げる公開講座もその一つであり、多くの大学において実施されております。その目的は、大学における教育研究の内容・成果を、社会の一般の方々にも分かりやすく公開することによって、いわゆる生涯教育の一端を担わせていただくとともに、大学に対するご理解を深めていただくことにあります。

かかる意図のもと、本学でも平成5年、大阪の毎日文化センターを会場にして、「天理大学公開講座」を16講座開講したのを皮切りに、同9年まで継続いたしました。1つの講座は平均して4～5名の講師によって担当され、6年には17講座、7年には11講座、8年には6講座、9年には5講座が開講され、この5年間に延べ248名の講師がこれをつとめました。この間お世話どり下さった毎日文化センターのご好意に対し、厚くお礼申し上げる次第であります。

また、平成7年12月からは、地元の天理市文化センターにおいても、「天理大学公開講座」が開講されるようになりました。天理市教育委員会と共催で開催されるこの講座は、少し形を変えて毎年4回、5月・7月・10月・12月にそれぞれ1日開講されるもので、最初の内は1日2講座、第4回からは1日1講座となりました。その都度バラエティーに富んだテーマを取り上げる本講座は15回を数え、今日なお継続中であります。

大学でどのような教育研究がなされているか、それは学部学科の構成からある程度理解されるでしょう。しかし、実際のところ同じ学内にあっても、誰がどのような研究に取り組んでいるのか、他学部他学科のことは分かりにくいものであります。今、公開講座の各題目を一覧すると、文学、歴史、考古、民俗、宗教、心理、スポーツ、あるいは地域研究など、実に幅広い分野にわたって、多様な問題が多角的に取り上げられていることが分かります。目下のところ、あまり明確でない天理大学の特色、個性というものも、こうした講座を積み重ねていく内、やがて鮮明になっていくことでしょう。

なお、今回まとめられる公開講座の記録は、文字通り過去の記録であって、それ以上のもの、すなわち公開講座の内容がそのまま書物になって出版されるようなものではないかも知れません。しかし、これが未来に大いなる発展を遂げる一粒の種子になることを願って止みません。

終わりに、これをまとめられた天理大学公開講座委員会の努力に対して、深甚なる敬意を表したいと思います。ありがとうございました。

1999年7月

第 1 部

天理大学公開講座（毎日文化センター）記録

平成5年～平成9年（1993年～1997年）に毎日文化センター（大阪市梅田）で実施した全講座のテーマと担当者を一覧表にまとめました。

天理大学公開講座（大阪：毎日文化センター）記録

平成5年度（1993年度）～平成9年度（1997年度）

平成5年度（1993年度）

講 座 名	講 師 担 当 者	月・日	
和歌の世界	柿本人麻呂	川 島 二 郎 (文学部)	4月 3日
	山上憶良	森 重 敏 (文学部)	4月 10日
	「古今集」の歌人たち	仁 尾 雅 信 (文学部)	4月 17日
	藤原定家	長 谷 完 治 (文学部)	4月 24日
	良寛	長 谷 完 治 (文学部)	5月 1日
	与謝野晶子	太 田 登 (文学部)	5月 8日
	石川啄木	太 田 登 (文学部)	5月 15日
健康と身体・運動	健康で長生きするには - 寝たきり、痴呆の予防	荒 地 秀 明 (体育学部)	4月 3日
	成人病の予防 - 食事と運動	荒 地 秀 明 (体育学部)	4月 10日
	3大死因の原因と予防 - 癌・心臓病・脳血管疾患	荒 地 秀 明 (体育学部)	4月 17日
	高齢者に適した運動 - 運動不足を防ぐには	久保田 正 躬 (教養部)	4月 24日
生命倫理と現代社会	スポーツと栄養 - 栄養と体力のかかりあい	寺 田 雅 子 (体育学部)	5月 1日
	社会福祉とは本当は何か 個別的処遇こそ本当の在り方	大久保 昭 教 (学長)	5月 8日
	生命と倫理 尊厳死・死生観	金 子 昭 (教養部)	5月 15日
	生命倫理と医学	小 泉 俊 三 (よろづ相談所)	5月 22日
	現代生命倫理の諸問題	飯 田 照 明 (人間学部)	6月 5日
	生命倫理と宗教 脳死	池 田 土 郎 (教養部)	6月 12日
舞踊と音楽	舞踊と生のリズム	小 林 正 佳 (教養部)	5月 22日
	民俗音楽の現在	小 林 公 江 (教養部)	6月 5日
	雅学 奏で、歌い、舞う	佐 藤 浩 司 (人間学部)	6月 12日
	現代音楽の現場	小 林 公 江 (教養部)	6月 19日
	民俗舞踊を踊る	小 林 正 佳 (教養部)	6月 26日
心のエコロジー - カウンセリングの現場 -	子供の心が見えますか	堀 尾 治 代 (人間学部)	6月 19日
	わたし・からだ・ことば	森 岡 正 芳 (人間学部)	6月 26日
	カウンセラーからのメッセージ - 学校と病院で	一 瀬 正 央 (人間学部)	7月 3日
	空想と現実 - 夢を読む	小 林 哲 郎 (教養部)	7月 10日
	カウンセラーの現場から - さまざまな施設で -	川 畑 直 人 (人間学部)	7月 17日
	対人関係を育てる	川 畑 直 人 (人間学部)	7月 24日
近世大和の暮らし	近世大和方言の成立	中 井 精 一 (参考館)	7月 3日
	近世大和の民俗	川 村 邦 光 (文学部)	7月 10日
	近世大和の考古学	置 田 雅 昭 (文学部)	7月 17日
	近世大和の歴史	谷 山 正 道 (文学部)	7月 24日
邪馬台国の風景	邪馬台国の風俗	飯 島 吉 晴 (文学部)	9月 4日
	邪馬台国の食糧事情	金 原 正 明 (参考館)	9月 11日
	卑弥呼径百余歩の墓	桑 原 久 男 (文学部)	9月 18日
		金 関 恕 (文学部)	9月 25日
	考古学から見た大和説・九州説	置 田 雅 昭 (文学部)	9月 25日
教祖とひながた	教祖の時代と社会背景	石 崎 正 雄 (おやさと研究所)	9月 4日
	親神の啓示と「月日のやしる」	荒 川 善 廣 (人間学部)	9月 11日
	明治新政府の宗教政策と教祖	神 田 秀 雄 (教養部)	9月 18日
	存命の教祖	笹 田 勝 之 (人間学部)	9月 25日
	「ひながた」の現代的意義	早 坂 正 章 (人間学部)	10月 2日
物語・説話の世界	日本霊異記をめぐって	中 村 宗 彦 (文学部)	10月 2日
	平安朝の歌物語 - 大和物語	仁 尾 雅 信 (文学部)	10月 9日
	お伽草子をめぐって	今 西 實 (文学部)	10月 16日
	浄瑠璃姫物語をめぐって	大 橋 正 叔 (文学部)	10月 23日
	西鶴諸国ばなし	大 橋 正 叔 (文学部)	11月 6日
		橋 本 武 人 (人間学部)	10月 9日
「元の理」の世界	聖地ぢばと「かぐらづとめ」	中 島 秀 夫 (人間学部)	10月 16日
	「元の理」の世界	松 村 一 男 (人間学部)	10月 23日
	「元の理」と世界の神話	宮 田 元 (人間学部)	11月 6日
	人間とは何か - 生き方を探る	佐 藤 浩 司 (人間学部)	11月 13日
	原典と「元の理」		

講 座 名	講師担当者	月・日	
ヨーロッパの文化	諺の中のフォークロア	日 置 孝次郎 (国際文化学部)	11月13日
	諺の中のメタファー	中 川 義 英 (国際文化学部)	11月20日
	幸福と倦怠	脇 坂 豊 (国際文化学部)	11月27日
	ミレイユ・マチュー	森 本 智 士 (国際文化学部)	12月4日
	18世紀フランス文化	篠 圭 司 (国際文化学部)	12月11日
	スペイン文化	山 本 徹 (国際文化学部)	12月18日
スポーツの現場	スポーツ・あそびのこころ	佐 村 幸 弘 (国際文化学部)	11月20日
	スポーツコーチ・監督のこころ	近 松 洋 男 (国際文化学部)	11月27日
	メダリストの人間学	林 正 邦 (体育学部)	12月4日
	スポーツウーマンのこころ	藤 善 尚 憲 (体育学部)	12月11日
台湾 - 歴史と文化	清朝時代の台湾	細 川 伸 二 (体育学部)	1月22日
	アミ族神話伝説を考える	安 田 昭 子 (体育学部)	1月29日
	日本統治時代の台湾人作家たち	村 尾 進 (国際文化学部)	2月5日
	日本統治期の宗教政策と宗教	池 田 士 郎 (教養部)	2月12日
親神・世界・人間 天理教の教理と信仰	台湾先住民族の詩と小説 モーナノンとトバスの文学	塚 本 照 和 (国際文化学部)	2月19日
	天理教信仰案内	下 村 作次郎 (国際文化学部)	1月22日
	世界は「神のからだ」	芹 澤 茂 (人間学部)	1月29日
	からだは「神のかしもの」	伊 橋 房 和 (人間学部)	2月5日
	「ひのきしん」 - 信仰の倫理	澤 井 義 次 (人間学部)	2月12日
「祭り」と「芸能」	「陽気ぐらし」と人類の未来	澤 井 義 則 (人間学部)	2月19日
	「祭り」の世界と「芸能」体験	塩 谷 悟 (人間学部)	2月26日
	「祭り」の民俗	小 林 正 佳 (教養部)	3月5日
	「祭り」としての「熱狂」	飯 島 吉 晴 (文学部)	3月12日
	「祭り」と民俗音楽	松 村 一 男 (人間学部)	3月19日
聖書の遺跡を掘る	ミコの世界	小 林 公 江 (教養部)	3月26日
	聖地の風土	川 村 邦 光 (文学部)	2月26日
	聖地の歴史	桑 原 久 男 (文学部)	3月5日
	旧約聖書の世界	山 内 紀 嗣 (参考館)	3月12日
	列王紀のエン・ゲヴ	金 関 恕 (文学部)	3月19日
	ユダヤ教とイスラエル	日 野 宏 (参考館)	3月26日

平成6年度(1994年度)

講 座 名	講師担当者	月・日	
異界を探る	三途の川と奪衣婆	川 村 邦 光 (文学部)	4月2日
	境界の神々	飯 島 吉 晴 (文学部)	4月16日
	汚れと禊ぎ	近 江 昌 司 (文学部)	5月7日
	山海経と魍魎魍魎	金 関 恕 (文学部)	5月21日
	鬼瓦の眼光	山 本 忠 尚 (文学部)	6月4日
南太平洋の文化	太平洋の先史文化	柴 田 紀 男 (国際文化学部)	4月2日
	ニューギニアの神話の世界	紙 村 徹 (参考館)	4月16日
	インドネシアの歴史 - 過去と現代を貫くもの -	弘 末 雅 士 (国際文化学部)	5月7日
	インドネシアの民話	相 馬 幸 雄 (国際文化学部)	5月21日
	インドネシアの民俗 - バリ島を中心に -	吉 田 裕 彦 (参考館)	6月4日
アジア・アフリカの社会と文化	インドネシアの宗教 - 土着宗教と世界宗教 -	山 本 春 樹 (国際文化学部)	6月18日
	東南アジア万華鏡 多民族社会マレーシアを中心に	藤 卷 正 己 (教養部)	4月9日
	中華都市	村 尾 進 (国際文化学部)	4月23日
	インド結婚事情	堀 内 みどり (おやさと研究所)	5月14日
アメリカから見た日本	アフリカのイメージと現実	戸 田 真紀子 (国際文化学部)	5月28日
	インシャーアッラーの世界	澤 井 義 則 (人間学部)	6月11日
	女性天国日本?	児 玉 佳與子 (国際文化学部)	4月9日
	変わるアメリカ人の日本観	北 詰 洋 一 (国際文化学部)	4月23日
	日本のキャンパスライフ	上 原 豊 明 (国際文化学部)	5月14日
		吉 川 敏 博 (国際文化学部)	
		M. J. アイナン (国際文化学部)	

講	座 名	講師担当者	月・日
これからの福祉を考える	高齢者との効果的なコミュニケーション 家族の福祉を考える 年金・医療保険制度はどうなる 嫁の消失と介護の担い手	南 彩 子 (人間学部)	5月28日
		登 丸 寿 一 (人間学部)	6月11日
		大 野 道 徳 (人間学部)	6月25日
		大 野 道 徳 (人間学部)	7月 9日
教祖とひながた	水の味がする - 貧に落ちきる 母として神として - 秀司とこかん 教祖に導かれて - 先人の信仰 門屋に出張って - 救いの第一線 嵐の中に立って - 官憲の迫害干渉 扉ひらいて - 正月二十六日の理	笹 田 勝 之 (人間学部)	6月18日
		西和田 ヤス八 (豊井ふるさと寮)	7月 2日
		澤 井 義 則 (人間学部)	7月16日
		中 島 秀 夫 (人間学部)	9月 3日
		早 坂 正 章 (人間学部)	9月17日
		笹 田 勝 之 (人間学部)	10月 1日
良寛和尚の人と歌	ふるさとの良寛 国上 (くがみ) の里の良寛 貞心尼と良寛	長 谷 完 治 (文学部)	6月25日
		長 谷 完 治 (文学部)	7月 9日
		長 谷 完 治 (文学部)	7月23日
中国古代の泥像から	七夕とランプ 唐古の楼閣まで アラブと埴輪の馬	近 江 昌 司 (文学部)	7月 2日
		金 関 恕 (文学部)	7月16日
		近 江 昌 司 (文学部)	7月23日
菅原と忠臣蔵	合作浄瑠璃の時代 菅原伝授手習鑑 仮名手本忠臣蔵	大 橋 正 叔 (文学部)	9月 3日
		大 橋 正 叔 (文学部)	9月17日
		大 橋 正 叔 (文学部)	10月 1日
「元の理」の世界 その	「こぶき」の世界 元はじまりの話を読む 「元の理」と現代思潮 夫婦の倫理・二つ一つ 根源への郷愁 元はじまりの話が指すもの - 救済の論理 -	芹 澤 茂 (人間学部)	9月10日
		宮 田 元 (人間学部)	9月24日
		松 村 一 男 (人間学部)	10月 8日
		橋 本 武 人 (人間学部)	10月22日
		澤 井 義 次 (人間学部)	11月12日
		荒 川 善 廣 (人間学部)	11月26日
親神・世界・人間 その	神の前での調和と共生 世界隅から隅まで 天理教の死生観 天理教の自然観から見た自然保護論 生命倫理と天理教信仰 子が泣くでない	伊 橋 房 和 (人間学部)	10月15日
		塩 谷 悟 (人間学部)	11月 5日
		佐 藤 浩 司 (人間学部)	11月19日
		佐 藤 孝 則 (おやさと研究所)	12月 3日
		金 子 昭 (教養部)	12月17日
		澤 井 勇 一 (非常勤講師)	1月28日
「一握の砂」を読む	「砂山十首」の風景 「穏やかならぬ目付」の啄木 「放たれし女」をめくって	太 田 登 (文学部)	10月15日
		太 田 登 (文学部)	11月 5日
		太 田 登 (文学部)	11月19日
銅鐸の謎	青銅文化の源流 銅鐸を掘る 海外に流れた銅鐸 銅鐸を埋める 銅鐸の祭り	山 本 忠 尚 (文学部)	11月12日
		置 田 雅 昭 (文学部)	11月26日
		置 田 雅 昭 (文学部)	12月10日
		桑 原 久 男 (文学部)	1月21日
		金 関 恕 (文学部)	2月 4日
自分さがしの旅 - カウンセリングの現場から -	人間関係の栄養学 - わたし・からだ・ことば - 空想と現実 - イメージと遊ぶ - カウンセリングの現場から (1) - 今、青年たちは カウンセリングの現場から (2) - 非行の臨床 -	森 岡 正 芳 (人間学部)	12月 3日
		小 林 哲 郎 (教養部)	12月17日
		堀 尾 治 代 (人間学部)	1月28日
		川 畑 直 人 (人間学部)	2月18日
健康と身体と運動	高齢者の体力の変化と運動効果 働きすぎ社会の健康づくり 高齢者に適した運動 中高年者の栄養と体力 高齢者医療の実態	伊 藤 稔 (体育学部)	12月10日
		近 藤 雄 二 (体育学部)	1月21日
		久保田 正 躬 (教養部)	2月 4日
		寺 田 雅 子 (体育学部)	2月25日
		荒 地 秀 明 (体育学部)	3月11日
展望・現代のドイツ	最近ドイツ事情 - 法と社会 - ドイツは変わる	浅 川 千 尋 (教養部)	3月18日
		B.U. カルステン (国際文化学部)	3月25日
展望・現代のロシア	ロシアの行方 - 歴史から見た現代のロシア - ロシア文芸は変わったか - パリ田村と旧ソ連の文芸 -	阪 本 秀 昭 (国際文化学部)	3月18日
		堀 江 新 二 (国際文化学部)	3月25日

平成7年度(1995年度)

講 座 名	講師担当者	月・日	
魔界・霊界	地獄の構造 - 絵巻の地獄めぐり -	近江昌司(文学部)	4月1日
	神話の魔王 - ギリシャ神話めぐり -	松村一男(人間学部)	5月6日
	日本古代の霊界	川村邦光(文学部)	6月3日
	サタンの象徴 - ヨーロッパの場合 -	日置孝次郎(国際文化学部)	7月1日
ヨーロッパの文化	切支丹のロマンと現実 - 宣教と殉教	近松洋男(国際文化学部)	4月8日
	シェイクスピアの楽しさ - ロメオとジュリエット	小林孝信(国際文化学部)	5月13日
	シェイクスピアの楽しさ - マクベス	小林孝信(国際文化学部)	6月10日
	切支丹のロマンと現実 - 西洋の風	近松洋男(国際文化学部)	7月8日
天理教原典(聖典)を読む	「おふでさき」を読む	芹澤茂(人間学部)	4月15日
	「みかぐらうた」を読む	笹田勝之(人間学部)	5月20日
	「おさしづ」を読む	佐藤浩司(人間学部)	6月17日
	教祖のお言葉 - 「天理教教祖伝逸話編」	中島秀夫(人間学部)	7月15日
健康・身体・運動	ストレスと健康について	近藤雄二(体育学部)	4月22日
	ガンの原因と予防について	荒地秀明(体育学部)	5月27日
	中・高齢者のスポーツと健康	伊藤稔(体育学部)	6月24日
	老化を防ぐための食生活	寺田雅子(体育学部)	7月22日
アメリカとヨーロッパ	眠れる皇帝バルバロッサ - ひとつのドイツ史 -	山本伸二(国際文化学部)	9月2日
	ミレイユ・マチュー	山本徹(国際文化学部)	10月7日
	18世紀のフランス	佐村幸弘(国際文化学部)	11月4日
	日米関係の中のアフリカ系アメリカ人	古川博巳(国際文化学部)	12月2日
	日本の常識・アメリカの常識	北詰洋一(国際文化学部)	2月3日
	戦時アメリカに抑留された日本人	山倉明弘(国際文化学部)	3月2日
ほろびの教え・生への教え - 比較教学への試み	幕末宗教事情	神田秀雄(教養部)	9月9日
	幕末宗教事情	神田秀雄(教養部)	10月14日
	終末の宗教と宗教の終末	金子昭(教養部)	11月11日
	自由の宗教と宗教の自由	金子昭(教養部)	12月9日
	「たすけ」と「救い」	澤井義則(人間学部)	1月13日
	「たすけ」と「救い」	澤井義則(人間学部)	2月10日
植物に感謝していますか - 植物の環境と生活	説教と訓話 - 二つの教え	岸義治(おやさと研究所)	3月9日
	進化の中での環境への適応	菅沼孝之(教養部)	9月16日
	多様な植物が望む環境と限界	菅沼孝之(教養部)	10月21日
	植物の子孫繁栄のための選択	菅沼孝之(教養部)	11月18日
変わる社会と生きがい	万葉集が編纂された頃の人々と植物	菅沼孝之(教養部)	12月16日
	社会が変わる、会社が変わる・高齢化社会と人事革命	井戸和男(人間学部)	9月30日
	変わる生きがい - 成人の学習ニーズ -	大串宛紀夫(人間学部)	10月28日
	現代の青少年問題 - 非行、いじめ、不登校 -	高橋史郎(人間学部)	11月25日
大阪の天皇陵を考える	学んで、変わる - 生涯学習と自己変容 -	岡田龍樹(人間学部)	1月27日
	應神陵の諸問題	竹谷俊夫(参考館)	11月4日
	仁徳陵とその周辺	日野宏(参考館)	12月2日
	雄略陵を考える	高野政昭(参考館)	2月3日
	継体陵と今城車塚	山内紀嗣(参考館)	3月2日
	推古天皇陵	太田三喜(参考館)	4月6日
良寛和尚の人と歌	良寛と万葉集	長谷完治(文学部)	1月20日
	良寛と橋由之	長谷完治(文学部)	2月17日
	良寛と貞心尼	長谷完治(文学部)	3月16日
江戸時代の中国と日本 - 忘れられた日中交流 -	長崎貿易と中国人	河内良弘(文学部)	1月27日
	お茶と豆腐 - 普茶料理の実像	河内良弘(文学部)	2月24日
	アヘンと中国	河内良弘(文学部)	3月23日

平成8年度(1996年度)

講 座 名	講 師 担 当 者	月・日	
成人病よさようなら	中高齢者と健康スポーツ - 一人ひとりが指導者	太田 雅夫 (体育学部)	4月13日
	あなたの「メンタル」は正しいか - 「ジギング・ウォーキング」の健康教育 -	伊藤 道郎 (体育学部)	5月11日
	栄養・食生活からみた成人病の予防 - 楽しくたべましょう -	寺田 雅子 (体育学部)	6月8日
	中高齢者の身体と心 - 豊かなライフスタイルをめざして -	河瀬 雅夫 (体育学部)	7月13日
原典でよむ和歌の魅力	万葉集 - 柿本人麻呂を中心に -	川島 二郎 (文学部)	4月20日
	古今集 - 紀貫之を中心に -	仁尾 雅信 (文学部)	5月18日
	新古今集 - 藤原定家を中心に -	長谷 完治 (文学部)	6月15日
今を照らす天理の言葉	ふしから芽が出る	澤井 義則 (人間学部)	4月27日
	慎みが道	早坂 正章 (人間学部)	5月25日
	人たすけたらわがみたすかる	佐藤 浩司 (人間学部)	6月22日
	いんねん寄せて守護	伊橋 房和 (人間学部)	7月27日
How we can Live in a Material World? 「モノ」社会をどのように暮らしていくべきか	Traveller or Tourist? あなたは「旅人」、それとも「観光客」? ...What is the Difference? - その違いは? -	C. サマーヴィル (教養部)	5月4日
	Are you a Resident or Inhabitant? あなたは「受け身」? それとも「能動的」?... Finding our place at home. - 「地域」の中で自分の「場所」を見つづけることの意味 -	C. サマーヴィル (教養部)	6月1日
マジナイと考古学	人形(ひとがた)とマジナイ	川村 邦光 (文学部)	10月5日
	動物とマジナイ	桑原 久男 (文学部)	10月12日
	お産と育児のマジナイ	飯島 吉晴 (文学部)	10月19日
	数とマジナイ	山本 忠尚 (文学部)	10月26日
	弥生のマジナイ	金 関 恕 (文学部)	12月7日
	中世のマジナイ	山内 紀嗣 (参考館)	12月14日
今を照らす天理の言葉 その	みな吉い日	早坂 正章 (人間学部)	11月2日
	息一筋が蝶や花	澤井 義則 (人間学部)	11月9日
	皆んな勇ましてこそ	橋本 武人 (人間学部)	11月16日
	朝起き・正直・働き	中島 秀夫 (人間学部)	11月30日

平成9年度(1997年度)

講 座 名	講 師 担 当 者	月・日	
子育てとカウンセリング	育児カウンセリング	鳥山 平三 (人間学部)	4月12日
	子育て支援の現状	上村 康子 (人間学部)	4月19日
	学校カウンセリング	鳥山 平三 (人間学部)	4月26日
	不登校児支援の現状	上村 康子 (人間学部)	5月10日
日本の民俗音楽 - 日々の暮らしと歌	子供をめぐって - わらべ歌と子守歌	小林 公江 (教養部)	5月17日
	暮らしと歌 - 仕事・祝い・まつり	小林 公江 (教養部)	5月24日
	南の島の歌と踊り	小林 公江 (教養部)	5月31日
今を照らす天理の言葉 その	病のものは心から	澤井 義次 (人間学部)	6月7日
	世界のふしん	笹田 勝之 (人間学部)	6月14日
	世界一れつみな兄弟	宮田 元 (人間学部)	6月21日
	成程の人	塩谷 悟 (人間学部)	6月28日
古代史・山の辺の道	東大寺山古墳と鉄刀銘	日野 宏 (参考館)	7月5日
	西山古墳と前方後方墳	山内 紀嗣 (参考館)	7月12日
	峯塚古墳をめぐって	高野 政昭 (参考館)	7月19日
	柚之内火葬墓と石上宅嗣	竹谷 俊夫 (参考館)	7月26日
今を照らす天理の言葉 その	女松男松のへだてなし	佐藤 浩司 (人間学部)	11月1日
	人間身の内は神のかしもの・かりもの	伊橋 房和 (人間学部)	11月8日
	ここはこの世の極楽	澤井 義則 (人間学部)	11月15日
	欲を忘れてひのきしん	笹田 勝之 (人間学部)	11月22日

第 2 部

天理大学公開講座（天理市）記録

天理市教育委員会との共催による天理大学公開講座の、平成7年(1995年)～平成9年(1997年)までの講座について、「ポスター」に掲載した講演概要案内をまとめました。

天理大学公開講座（天理市）の記録

平成7年度（1995年度）～平成9年度（1997年度）

第1回 平成7年（1995年）12月9日

『邪馬台国は大和か』 樫本町出土刀銘は語る

文学部 金関 恕

樫本町の東大寺古墳から出土した刀は西暦188年頃の作品、その頃の日本は倭国大乱の時代。そしてヤマタイ国の女王ヒミコの使いが行ったのは236年、お土産には「青銅刀2個」もある。ひよっとしたらヒミコの刀では？ ヤマタイ国の遺跡を考える。

『石上と地震』

国際文化学部 日置 孝次郎

『石上と地震』とは、あまり聞きなれない文句でしょう。むしろ「石上対地震」の方がよかったですでしょうか。なぜならば、石上の神様が地震を起こすモノ、たとえばナマズ（鯰）をやっつける話だからです。グローバルな文化人類学の視点から、「石上」の意味と歴史を考える。

第2回 平成8年（1996年）5月25日

『天理スポーツとオリンピック』

教養部 森井 博之

オリンピックの目的は、世界平和への貢献である。そして、天理スポーツの目指すところは、「陽気ぐらし」世界の実現である。

『伝統的民間療法と現代医学』

体育学部 荒地 秀明

薬草、種子等を使う昔からの伝統的民間療法と配置薬について、その化学成分と薬効を現代医療と比較して、その合理性と問題点について述べる。

第3回 平成8年（1996年）7月6日

『日本霊異記を読みましよう』 雷神を捉えてみれば

文学部 近江 昌司

雷を捕らえる少子部さん、それを恐れる天皇。日本書紀では三輪の神様も同じ目に？ 古代・雄略朝の一側面を説話の世界に考える。

『百姓と胡麻の油 享保の改革と大和の民衆』

文学部 谷山 正道

将軍吉宗は「幕府中興の英主」といわれるが、享保改革期に生きた民衆にとってはどうだっただろうか。大和の幕府領を主な舞台として年貢問題をとり上げながら地域民衆の視座から幕府享保改革を見つめなおしたい。

第4回 平成8年(1996年)10月5日

『変革期における職業人生 就職、転職、離職』

人間学部 井戸 和男

日本型雇用慣行が崩壊し、“サラリーマン破壊”といわれるほど企業社会が変わってきています。一方、若者は氷河期といわれ、引き続き就職難が続いています。また、高齢化社会における働きがい、生きがいも大きな課題です。これからの働きがい、生きがいについて、長年の実務経験と体験に基づいて語ります。

第5回 平成8年(1996年)12月7日

『黄金の墓の発見と博物館建設』

国際文化学部 關 雄二

南米アンデス山中で実施してきた発掘調査を通じて、創造力豊かな古代アンデス文明の一端を紹介するとともに、異文化で調査することの難しさについても触れようと思います。とくにアメリカ大陸最古の金製品を含む墓の発見は、その学術的な意味もさることながら、保存をめぐる騒動を引き起こしました。村人との対話を通じて解決法を模索した経験を披露し、国際援助の難しさを改めて問うてみたいと考えています。

第6回 平成9年(1997年)5月17日

『良寛をめぐる人々』

文学部 長谷 完治

霞立つ永き春日を子供らと手まりつきつつこの日暮らしつ 良寛
……この歌のように、江戸時代後期の禅僧良寛は、子供たちと手まりをついたり、かくれんぼをして遊び暮らした、変わったお坊さんとして知られています。しかし、良寛の実像は果たしてそのようなものであったかどうか、そういった点にも思いを巡らしながら、今回の講座では、その良寛さんを物心両面から支えた周辺の人々の資料を通して、良寛及びその周辺の人々の文学と人生について考えてみます。

第7回 平成9年(1997年)7月5日

『漢字文化圏におけるハングルの文化』

国際文化学部 平木 實

私たちは漢字文化圏といえば東アジアの中国・朝鮮(韓国・北朝鮮)・日本の三国を思い浮かべる。とりわけ朝鮮半島は中国と日本の中間に位置しているところから、言語構造が異なるにもかかわらず、古来より漢字文化を受容し、日本などにも伝播してきた。そこで漢字とその文化を民族言語のハングルとのかかわりのなかでどのように展開してきたかについて考察し、東アジアの漢字文化の交流の諸相の一端について言及したいと思います。

第8回 平成9年(1997年)10月4日

『中山みきと被差別民衆』

教養部 池田 士郎

天理教は今年立教160年を迎える。その始まりは、中山みきという一人の女性が、権力や財力を捨て、世俗的な意味ではもっとも力のない者となって、親神の教えを実践することに始まる。この「貧」に落ち切る教祖の歩みを、被差別部落に残る教祖の伝承を通して見直すとき、被差別民衆へと注がれていた教祖の救いのまなざしは、人びとを陽気ぐらしの世界へ導く「世直し」のエネルギーに満ちあふれたものであることがわかる。

第9回 平成9年(1997年)12月13日

『中高年者の健康を目的にした運動とその自己管理法』

体育学部 伊藤 稔

最近では、多くの中高年者がスポーツに参加するようになってきたが競技会に参加するものはごく稀で、その8割以上は健康のために実施していると述べている。健康を目的にしたスポーツを「健康スポーツ」と呼び、「競技スポーツ」とは別の指導法がある。しかし、このような指導法を会得している指導者は数が少なく、従来の競技スポーツの運動強度をやや少な目にして指導している場合が多い。

今回の講座では特別な指導者に頼らないで、脈拍数、呼吸法、主観的な運動強度を利用して、スポーツの実施を自主的に管理する方法について述べてみたい。

第 3 部

天理大学公開講座（天理市）平成 10 年度（1998 年度）の講演要旨

世界の文化と日本の文化 - 海外の人たちによる文化比較 - の総合テーマのもとに実施された、平成 10 年度の 4 回の講座について、担当者が講演要旨をあらためて編集執筆したものをまとめました。

『明・清以降の中日文化交流』

国際文化学部 徐 興慶

はじめに

従来、文化交流史の研究は、外交史、交渉史、関係史などのように国際交流史の一つの分野として進められてきました。また、外来文化の受け入れ方も国によって、時代によってそれぞれの特色があります。中国と日本の文化交流を考えますと、その歴史が長い、両国における文化の発展は、常に異文化の接触によって起きるものであります。そもそも日本は一概には言えないかもしれませんが、外来文化に対して極めて寛容な態度で受け入れ、つまり、包容性に富んでいるとよく言われています。

ここで、書籍及び人物の分野を取り上げながら、中国の明・清時代以降の近世・近現代における中日文化交流の実態を述べさせていただきたいと思えます。



明・清における中日文化交流

明(1368 ~ 1661)の時代の思想面においては、基本的に前期の朱子学による官学主義と後期の王陽明の陽明学を唱える実践主義に分けることができます。文学面においては、白話小説が作られ、庶民に広く流行し、『西遊記』、『古今奇観』などの名作が生まれ、江戸文学に大きな影響を与えることになりました。宗教面においては、唐・宋以降の仏教が国の保護のもとに復興される

ことによって、明末に至るまで数多く有名な禅僧がでました。臨済の黄檗禅宗にも多数の禅師が日本に渡ってきました。政治面においては、1616年中国の北方にある満という民族に清太祖が誕生してから1661年南明政権が完全に敗北するまで、およそ45年間に渡って戦争が絶えませんでした。この期間を、日本では、明・清交替期と呼んでいます。これまで中国を長く支配してきた漢民族にとって、政権を満という異民族の清に譲れず、明の政府と生死をともにして抵抗するのは、当然なことだと思われれます。しかし、異民族に支配されたくない、戦場から避けたい。これは当時の中国の儒者たち、文人たちの率直な反応と言えるでしょう。一方、この時期に当たる江戸時代は、鎖国とは言え、長崎の港を窓口として、中国船とオランダ船の来航を認め、貿易活動が活発に行われたのであります。この時代背景と地理的な環境によって、自然的に中国人の日本に移住する現象が起き、そして中日文化交流そのものが発生したのであります。江戸時代から元禄年間(1703)までに限って、中国から日本に移住した著名な儒学・漢文学・書道・医術・工芸などの文化人は、40名を越えていました。その中で、最も日本の文化に影響を与えた人物は、なんとと言っても、中国の臨済黄檗禅宗を日本に移植した隠元(1592 ~ 1673)と明末の遺臣である朱舜水(1600 ~ 1682)の二

人です。二人は、明の滅亡を悲しみ惜しむ点では、ほぼ同様でしょうが、渡日の動機には異なるところがあります。

隠元は、1654年に日本側の招請を受け、中国の福建省から長崎に渡り、主として黄檗禅宗の文化を日本に移植したのであります。一方、朱舜水是徹底的に清朝に対抗し、明を援護する、いわゆる反清復明の志士だったので、明朝の復活の希望が完全に消えた1660年から長崎に定住するようになりました。中日文化交流の貢献という角度から説明しますと、朱舜水は主に日本の儒学・史学の分野に影響を与えていました。

近世における中国文化の受容地は長崎でした。当時、中国貿易商人と唐船の乗組員の定住や滞在などの管理に「唐人屋敷」が作られた。「唐人屋敷」は中国の禅師・儒者・医者などの文化人が、長崎渡来の集会所として、また日本人との交流の場として、長崎唐三ヶ寺が建てられました。この唐三ヶ寺を建てたもう一つの理由は、幕府のキリシタン弾圧政策に応じたものとも考えられます。この期間の中日交流の架け橋として、唐通事という役人(いわゆる日本の初代華僑)が献身的な役割を果たしていました。一方、隠元禅師の渡来と黄檗文化の普及に伴って、京都宇治に黄檗山萬福寺が建立されました。

隠元禅師の渡日と黄檗文化の移植

隠元禅師は、1592年福建省福清県に生まれました。1630年39歳まで、明・清戦争に見舞われながらも、南京・寧波・紹興・舟山列島各地の有名な寺院を歴訪し、さらに浙江省嘉興府にある広慧寺で臨済禅僧として参禅修行をしました。その後、福建の黄檗山に入り、1636年45歳のときに福建黄檗山萬福寺の住職になりました。もともと萬福寺は、唐の時代631年に建てられた寺院でありましたが、明の萬歴年間神宗皇帝から大蔵經600巻あまりを授けられ、萬福禅寺と改称しました。さらにその伽藍の増築にあたり、隠元の懸命な努力によって一新され、ついに中国の臨済宗としての有名な禅宗寺院となりました。

隠元は、1654年6月21日に福建の廈門を起ちまして、7月5日に長崎に到着しました。隠元の日本渡来に関して、中国の仏教界からも注目されていました。宗派を問わず、隠元に次いで渡来した人々は、30名にのぼりました。中には、禅僧のほか、絵画や書道・煎茶・料理など様々な文人趣味を備えた人材が含まれていました。翌日一行は、すぐ興福寺にはいりました。隠元が長崎に渡ってくる前に、すでに唐三ヶ寺が建てられ、しかもそれぞれの寺院から中国の名僧を招いて、代々の住職に充て続けていました。隠元の来日について、従来の研究史では、幕府の招請とか長崎奉行の招請とか戦乱を避けるためとか、いろいろな説がありますが、私は、隠元が長崎三ヶ寺で定住した中国の禅師たちから四回に渡って招請された行為に感動したことにあるとおもいます。それから隠元は戦乱中の福建省の廈門から出航したことから考えますと、その地にある南明政権を主導していた鄭成功の支配下の船に乗って長崎にやってきたことは、十分考えられます。当時、鄭氏一族は、しきりに日本に援軍を求めようとした出来事について、元東京大学の石原道博先生の『日本乞師の研究』の論著に詳しく記されています。従って、隠元は、鄭成功に依頼され、日本に援軍を求めるようにという使命を担って日本にやってきたことは十分考えられます。これは、数年前に京都宇治の黄檗山萬福寺に所蔵されている隠元と鄭成功関係文書の公開によって、筆者の推測を裏付けることができました。

文化趣味について、黄檗宗の禅師たちの共通点は、書を書くことですが、明の時代では、禅僧の書は正統派ではないとして、あまり高く評価されなかったが、日本では、正統性から逸脱した書を大事にする流れがありました。特に隠元・木庵・即非の書は、黄檗の三筆として知られています。なお、黄檗禅僧たちは、長崎に渡来した際、明代の書道を代表する文徵明・張瑞図・陸志仁など名人ばかりの書画も携えてきました。このことについて長崎県立図書館所蔵の18世紀後半の『明安

調方記』には、中国絵画の輸入を断片的に記載しています。

江戸初期から日本の絵画界は狩野派によって支配され、絵画の表現は自由さを失っていました。表現そのものが本質を失われつつある流れの中で、黄檗宗の絵画が登場し、その自由な表現性を学ぼうとする日本の文人が、黄檗寺院と接触するようになりました。こうして新しい風が吹き込まれ、近世日本の絵画界に大きな影響を与えました。

隠元が日本に到着する前にその語録は、すでに日本に流布されていました。日本渡来の消息は日本国内に急速に広がりましたが、先程、既述したように隠元の渡来は、日本に援軍を求めようとする動きとして幕府にも疑われ、警戒的な態度が取られました。しかし、隠元は布教活動のみ懸命に努め、さらに関係する日本僧の奔走によって、幕府側も隠元に対する態度を次第に改めるようになりました。そして1656年7月に京都・大阪・奈良など五カ所の布教活動が許可され、さらに普門寺で200名以内の日本僧の受講も許可されるようになりました。1658年に隠元は、ついに江戸城に登城し、将軍徳川家綱に拝謁することを得ました。これをきっかけに普門寺は幕府から毎月「扶持米」15石を支給され、隠元に対する援助が表明されたのであります。ついに1659年に隠元は、幕府から京都宇治の土地を授けられ、翌年の1660年12月に中国福建の黄檗山萬福寺の例に従い、寺院名も「黄檗山萬福寺」として開山し、自ら70歳の高齢で初代の住職に就任しました。しかし、最初は黄檗宗と呼ばず、臨済宗黄檗派または禅宗黄檗派と称されました。正式に黄檗宗と呼ばれるようになったのは、明治9年、1876年以降のことです。

隠元渡来約100年後、宇治の萬福寺を本山とする黄檗派は、幕府と各地の大名の援助によって、日本全国に900もの寺院にまで広がるようになりました。『隠元禅師語録』によりますと、九州・山口の大名は参勤交代に際し、隠元禅師を訪れたり、筆談したり、書簡を交わしたりする人数は23名にも上りました。なお、各藩の大名が接触したのは、隠元だけではなく、木庵や即非・独立など数多くの黄檗僧に及んでいました。ここで独立なる人物をご紹介しますと、彼は、儒者、特に医者として知られ、かつて隠元の書記として務めました。長崎で朱舜水と交際したことがあり、岩国の吉川広嘉に奉じた人物であります。学識に富んでいる独立は、詩作、書道、彫刻などの名人でもあり、江戸初期の日本書道に大きな影響を与えた人物でした。次に水戸学に多大な影響を与えた明の儒者朱舜水について、述べさせていただきます。

朱舜水と中日文化交流

朱舜水は、1600年に儒者を輩出した浙江省余姚県に生まれました。彼は、やはり明・清の戦乱を避けるため、20歳から中国の各地へ遊学に出かけ、その後、海外に出て、約17年間の歳月をかけて、中国・日本・安南（ベトナム）の間を往来していました。今までの研究では、朱舜水の海外貿易活動と直接に結び付ける史料が出てきておりませんが、彼は、もともとから明朝の再建に尽力していたので、反清朝のグループを援助しようとし、軍事費用を調達するために海外へ出たのではないかと推測する学者もいます。そして、筆者が1986年に九州歴史資料館柳川古文書館から発掘した朱舜水書簡によって、彼は日本に援軍を求めようとしたことが、明らかになっています。

朱舜水は、51歳1650年まで、明あるいは南明の朝廷から前後12回にわたって、いろいろな役職に推薦されましたが、いずれも辞退しました。彼は、明朝復活の望みは、もはやないと見抜いたに違いありません。長崎で日本に永住を決心した後、1662年4月に南明政権の永曆皇帝は、雲南で殺され、5月に明朝復活の主役である鄭成功も台湾で亡くなり、さらに11月に自分が奉った魯王も金門で亡くなりました。これで南明政権はついに終わりを告げたのです。一方、日本では、江戸時代に入って60何年間が経過し、幕藩体制は、すでに強固され、大いに経済の発展と文化教育を奨励する時期を迎えていたのであります。水戸藩々主徳川光圀は、初代将軍家康の孫に当たり、幕府直轄の「御三家」の一つですので、幕府との関係は、最も密接でした。光圀が、水戸藩の文

化・教育事業の向上を図ろうとする際、朱舜水は、国師として江戸に招聘されました。以降 18 年間にわたって、光圀の御恩に報いるため、水戸藩の文化・教育事業にベストを尽くし、儒学を中心とする知識に関しては、知っていることを残さずに普及しました。その哲学思想が影響を及ぼすところは、水戸藩だけではなく、日本全国にまで強く、広く広がったと言っても過言ではありません。朱舜水 82 年間の生涯を振り返ってみますと、彼が学問を最も発揮し、そして充実したのは、やはり、1665 年から 1682 年までの 18 年間江戸の講学時代にあったと言わなければなりません。因みに朱舜水は、1682 年江戸の水戸屋敷で亡くなりました。その場所は、今、東京大学農学部のカンパスに変わりましたが、現在でも「朱舜水終焉之地」の碑文が建てられています。朱舜水の遺骨は、のちに茨城県常陸にある徳川家私有の墓地に明朝の形をしたお墓に葬られました。

朱舜水が亡くなった 2 年後の 1684 年から、光圀と朱舜水の弟子たちの手によって、その関係書簡がまとめられ、全集として出版されました。1981 年まで日・中両国から出している朱舜水的全集の版本は七つありますが、筆者が 1986 年から九州の柳川古文書館をはじめ、日本全国各地で集めてきた新史料を『朱舜水集補遺』として 1992 年に台湾の学生書局にて出版しました。

近・現代における中日文化交流

1840 年のアヘン戦争以降、南京条約が締結された後、清朝は事実上、鎖国政策を解除して、国際化というよりも近代化を図らなければならない時期に迫られました。一方、日本でも、西洋列強の軍事力の脅威のもと、幕末から明治初期にかけて近代化に力を入れました。そのため、これまで中国文化だけを受け入れていた態勢を一転して、福沢諭吉が称えている「アジアから脱出して、ヨーロッパへ入ろう」という「脱亜論」の思想に基づき、完全に中国文化を離脱して直接西洋諸国から先進的な科学技術や文化を大量に導入することになりました。明治初期以降、これまでの時代と違って、日本から中国へ渡った文化人は、ほぼ「日本教習」という身分に限られるようになりました。この現象に対し、中国が近代化を歩んで行くプロセスの中では、数え切れないほど、たくさんの文化人が日本を訪れるようになりました。何故かと言いますと、日本は、直接西洋に留学生を派遣したり、西洋の先進的な科学技術や文化知識に関する本を翻訳したりすることによって、近代化そのものがどんどん進められており、各分野の成果が確実に芽生えていったからです。この日本の近代化政策を真似しようとした中国は、大量の留学生の派遣を決めました。しかし、中国の留学生は、直接西洋へ行くのではなく、日本にやってきたのです。これは、留学生を日本で日本の近代化の様子を見学させながら、日本に入ってきた西洋知識を吸収させた方が中国政府にとって財政負担が軽くなるし、その上、学生の学習するスピードも速いし、効果も抜群であるというメリットを考慮して取った政策だと思えます。勿論、当時日本にやってきたのは、留学生だけにとどまらず、外交官や公務員ないし政治家なども含まれていました。

ここで、明治 10 年、1877 年に清政府の初代駐日公使館文化参事として来日した黄遵憲なる人物を紹介します。黄遵憲は、日本で約 6 年間外交官の事務を扱いながら、日本における調査研究や文化交流について大いに力を注ぎました。その成果として、多大なる『日本国志』という日本に関する総合研究書をまとめました。彼が、『日本国志』を執筆する動機は、これまで中国人の日本に対する不十分な認識や誤った考え方を正すこと、そして、明治維新に関する日本のあらゆる事情を中国人に伝えるところにありました。黄遵憲は、自分が駐日の外交官である以上、そういう責任があると考えていました。しかし、黄遵憲が『日本国志』を執筆する過程では、さほど順調ではありませんでした。彼は、来日後の翌年 1878 年から資料を蒐集し始め、79 年から正式に編纂し、途中翻訳・校正などの困難を乗り越えて、1882 年彼が日本を離れるまで『日本国志』計 40 巻、約 55 万字の原稿ができました。それから、彼は 1885 年まで清朝の駐サンフランシスコの総領事として勤めました。その後、中国に帰国し、『日本国志』の補充作業と写本四点を作って 1887 年についに完

成したのです。写した写本は、それぞれ総理衙門・知日派の李鴻章と中国近代教育の先駆者である張之洞に提出しました。そして日・中の下関条約を結んだ1895年になって、やっと刊行されることになりました。黄遵憲の『日本国志』は、日本研究の集大成と言えるもので、勿論、中日文化交流の貢献にも大変評価すべき著作であります。

ところで、黄遵憲は、詩人としての才能も知られています。この『日本雑事詩』は、彼が日本滞在中に、各地を見学しながら、いろいろな日本人と出会って、日・中文化を比較したり、自分が感じ取った事を七言絶句の形で詠ったものであります。日本の近代化を見習うため、次から次へと渡日した知識人は、今までの研究で明らかにされているのは、少なくとも100名を超えたという。

最後に現代における台湾と日本の文化交流について、簡単に触れたい。

結びにかえて

ご承知のように1972年9月に台湾と日本の国交が断絶されてから、台湾と日本の間の文化交流は、すでに政府レベルから離れて民間レベルに移っているため、明確な全体像を把握するには、困難な面があります。しかし、両国間に各種の民間交流団体が設立されるにつれ、文化面での交流が盛んに行われてきました。特に台湾では、ここ数年間、各大学をはじめとし、専門学校、高等学校ないし中学校に至るまで、積極的に日本の各大学と協定関係を結ぼうとする傾向が目立つようになりました。そして、この協定関係を通じて、語学教育の国際交流もさることながら、さまざまな国際学術会議・学生ホーム・交換教授・交換留学生などの交流も頻繁になってきております。

台湾では、1963年に、筆者が勤めている中国文化大学の日本語学科、1965年に日本研究所（大学院）がそれぞれ設立されたことを皮切りに、日本語学の勉強と対日本の各分野の人材育成に重点を置いてきました。以降、淡江大学、輔仁大学、東呉大学など、1991年に国立政治大学、1994年に国立台湾大学を含めて計十校の大学が日本語学科や大学院を設置するようになり、人材の養成に当たっております。なお、1992年8月に国立台湾大学の日本研究総合センター、高雄にある国立中山大学の日本研究センターも同時に発足しました。そして「日本研究学会」、「台湾日本語学会」、「日本語教育学会」などの学術団体もどんどん設立され、台湾における日本研究は徐々に充実されていくところであります。一方、台湾に設置されている日本政府の準公的機関の交流協会は日本政府の「平和友好交流計画」に基づき、1996年より東京及び台北に日台交流センターを設立し、図書室を設けました。それに台日学術研究者の相互派遣や各分野に渡る文化交流事業を積極的に進めております。それから最近の新聞記事によりますと、日本政府は、参議院・衆議院が可決された法案に基づいて、1998年6月から台湾人のパスポートを認めるようになります。それに台湾の文部省にあたる教育部は、1998年9月から海外の留学生に対し、100名枠で、月約6万円程度の研究費や奨学金を提供することもすでに決定致しております。なお1998年5月11日付けの朝日新聞の記事によりますと、日本では関東地域を中心とする「日本台湾学会」が関西、天理大学の「天理台湾学会」、「台湾文学研究会」など学術団体に次いで発足することとなりました。

「日本台湾学会」の設立趣意書には「台湾は学際的地域研究の対象にふさわしい濃厚な個性を有している」と書かれており、これから日本における台湾研究は、従来の植民地支配関係、オランダ史、日本近代史の一部の枠から、台湾の地理的、民俗的、歴史的、文学的など幅広い分野へ発展していくことになるでしょう。また両国の民間や教育機関による人的・文化的な往来もより活発になるに違いありません。これから、中日文化交流の研究と台日文化交流の発展を期待致してやみません。

第11回 平成10年(1998年)7月4日

『日本人の影響を受けたブラジルのベースボール』

国際文化学部 Reimei YOSHIOKA

1) ブラジルの概要



- ・西暦 1500 年 4 月 22 日に発見
- ・1822 年 9 月 7 日にポルトガルから独立
- ・総面積：8,547,403 km²（日本の約 23 倍）
- ・人口：157,079,573 人（日本の総人口より 19% 多い）
- ・言語：ポルトガル語
- ・民族構成：インディオ、ポルトガル人、アフリカ人、イタリア人、スペイン人、日本人、ドイツ人、アラブ人、その他
- ・経済開発史：19 世紀初頭までは、パウ・ブラジルの原木採取、砂糖きび栽培、牧

畜、地下資源の採掘などが主な産業であったが、その後、1930 年まではコーヒー、綿、ゴム、とうもろこし、米、麦、オレンジなどが産業の中心となった。1930 年以降は、自動車、コンピューター産業などの工業化がすすめられるようになった。

2) 日本人移民

- ・1888 年の奴隷制廃止以後、ブラジルの農場経営者は、コーヒー産業にかかわる労働力を当初ヨーロッパ移民に求めていた。しかし、労働にまつわる環境、条件などの劣悪さから農場から逃亡する者が相次いだ。そこで、ヨーロッパ移民に代わる労働力をアジアからの移民に求め、1895 年、フランスのパリで、日本とブラジルの協定が結ばれるに至った。
- ・1908 年 6 月 18 日、781 名の日本人移民が笠戸丸でサントスの港に到着した。しかし、これらの日本人移民も言語や習慣の違いのみならず、コーヒー農場における、奴隷に対する扱いとさして変わらない労働条件に失望し、夜逃げ同然で農場から逃亡する者が相次いだ。
その後、1926 年までに 41,269 人、1940 年までに、132,729 人の日本人がブラジルに移民として渡った。

3) 第二次大戦以前のベースボール

日本人移民はブラジルに、さまざまな習慣や文化をもたらしたが、その中の一つがベースボールであった。このベースボールは、ブラジルにおいてはすでにアメリカ合衆国領事館、冷凍会社、電力会社、鉄道会社などで働くアメリカ人によってリクリエーションの一環として行われていた。

しかし、日本人移民が到着し、主にサンパウロやレジストロなどの入植地で活発に行われるようになった。その後、主にサンパウロ州西部の開拓が進むにつれて、ピリグイ、アリアンサ、チエテ、バストス、アサイー、プレジデンテ・プルデンテ、マリリアなどの地域にも及んだ。

第二次大戦以前のベースボールは、サンパウロ市を中心にノロエステ地方、パウリスタ地方、ソロカバ地方が最も活発であったが、そのほとんどは日本人及び、日本人子弟によって日本のルールで行われ、ブラジル人（非日系人）は皆無であった。

ベースボールの道具は日本から持って行ったものや、手製のバット、グローブ、ボールなども使用されていた。また、頻繁に各入植地対抗の試合も組まれ、上記の入植地間の対抗意識もすさまじいものであった。

しかし、第二次大戦が勃発し、それらのスポーツ交流も1941年以降は禁止され、1946年まで再開されることはなかった。

4) 第二次大戦後のベースボール

第二次大戦下における日本人、イタリア人、ドイツ人に対する数々の制限も終わり、サンパウロ州を中心にパラナ州、マツト・グロッソ州、リオ・デ・ジャネイロ州、パラ州、ミナス州など日本人も徐々にベースボールの活動を再開し、1946年9月18日、オリンピオ・シルヴァ・エ・サー氏を会長としてサンパウロ州ベースボール及びソフトボール連盟が設立される。

サンパウロ州は8つの地域に分けられ、それにパラナ州の選抜も加えられ、1946年には第1回全伯ベースボール大会（クラブ対抗）が開催された。翌年には日伯新聞とパウリスタ新聞の主催により、成人クラスと14才までの少年クラスでの選抜大会が開催された。その後、15才から18才までの青年クラスの対抗戦が組まれ、これにはサンパウロ新聞社が主催者となった。そしてクラブ対抗の試合での優秀選手は全伯ヘントリーされるようになった。

現在では、さきのクラスも10才から始まり、2才毎に振り分けられ、ミリン、インファンチル、ジュニオール、ジュヴェニエル、アダルト、そして35才から65才までは5才ごとにくぎられたヴェテラーノのクラスの中で行われている。

ボールについては、ミリンとインファンチルのクラスでは軟球、その後は硬球、そしてヴェテラーノでは準硬球が使用されている。60年代以降では、主に女子部でソフトボールも盛んになってきている。

5) 国際交流について

日本との関係

アメリカ合衆国によってもたらされたベースボールは、日系人によって今日までの基礎作りが行われてきた。そういったことから、現在では日本人のスポーツであるとまでいわれている。しかし、日系人とブラジル人との混血の度合いが進むにつれて、いわゆる「ガイジン」の存在も顕著になりつつある。

1958年、日本人移民50周年を記念して、日本から早稲田大学野球部がブラジルに遠征し、ブラジルのベースボール界に衝撃を与え、その後、アメリカのコロンビア大学も遠征し、ブラジル選抜をメッタ打ちにした。

しかし、日本の野球の影響となると、現在まで、東芝、明治大学、サロンパス、慶應義塾大学、本田技研、日本選抜、各高校やジュニア・クラスの遠征が大きいと言える。また、川上、篠原、柿野、三好、浅野などの監督や鈴木、山本、広岡、高野連の牧野氏らの来訪もあるが、90年代に世界制覇を成し遂げた少年クラスの日本選抜のブラジル遠征はやはり大きな衝撃を与えた。

これらの多くの交流は、日本のプロやセミプロにとって新たな人材発掘の場となり、ブラジル野球界にとっても、現在、広島カープに所属する7名のブラジル出身者にとっても有益であったと言

える。

アメリカ合衆国との関係

前述のように、アメリカからの最初の訪伯チームはコロンビア大学であったが、その後、主にパン・アメリカン選手権でのジュニア・クラス選抜の遠征であったり、ブラジルからのアメリカ遠征も頻繁に行われるようになってきている。特に、近年ではアメリカの大リーグにブラジルから2名の選手が契約を交わし活躍をしてはいるが、実際には、日本との交流の方が頻繁に行われているのが現状である。

ラテン・アメリカとの関係

ラテン・アメリカの場合はそのほとんどの国々がサッカーを主なスポーツとしているために、ベースボールを行っているところは少ない。例えば、アルゼンチン、ペルー、チリ、エクアドル、コロンビアなどは初歩の段階のベースボールを行っている。ヴェネズエラにはプロのチームが存在するが、主な選手は年俸の高いアメリカ大リーグへと移籍するのが常となっている。このため、これらラテン・アメリカ諸国の選抜や代表との試合は常にブラジルが優位にたっている。

ラテン・アメリカ諸国の中では、ベースボールを国技とし、プロチームも存在するキューバが最も手強い。また、メキシコもプロリーグを設立し、近年徐々に力をつけてきている。そのほか、コスタリカ、グアテマラ、パナマなども近年強くなってきている。

それらの中で、ブラジルのベースボールはすでにパン・アメリカン大会や南米チャンピオン大会などにおいて、多くのクラスで優勝を数えており、ラテン・アメリカ諸国の中ではかなり高い位置にある。

6) ベースボールの状況

ブラジルにおける過去のベースボールは、コロニア(入植地)と呼ばれる地域に住む日本人やその子弟たちによって主にリクリエーションの手段として行われてきた。つまり、日系人でベースボールを一度も行っていない人は少ない。それは、これらのコロニアでのベースボールは、子弟の人格形成、情操教育の手段となっていたからでもある。グラウンドにはいる時には「おじぎ」をし、試合の前後にも対戦相手に「おじぎ」を行うことなども教えられた。

試合では日本語、英語、スペイン語が飛び交う。例えば、「ジャキュウ」「ベースボール」「ベイゼボウ」、「トーシュ」「ピッチャー」「ピッチャ」、「ペロテーロ」「ソーシャ」「ランナー」、「イチルイ・ニルイ・サンルイ」「ファーストベース・セカンドベース・サードベース」「ファスト・セカンド・サド」などである。

内容については、日本方式の守りを中心に「バント」などが行われ、フォームを大切にし、時にはベースボールの醍醐味すらも奪ってしまう基本重視の野球になってしまっている。しかし、国際試合を消化してゆく中に、徐々に技術や父兄の意識内容も変化しつつある。父兄や選手たちにとって重要なことは、アメリカや日本のベースボールと交流を重ね、何がなんでも勝利することである。このために、多くの父兄は、子弟の学校教育を犠牲にして、彼らにベースボール教育を施すケースが近年増えてきている。

それぞれのクラブも、いろいろな地域から良い選手を誘ってきたり、ここ8年前後は、キューバからプロの監督を招請したりと、手を尽くすケースが目立ってきている。つまり、残念ながら子弟の人格形成、情操教育は忘れさられている傾向にある。また、連盟の中でも選手層を増やし、クラ

ブの強化のみに心を奪われるケースが多くみられるようになってきている。

こうした状況の中でも、オリンピックの正式種目になり、テレビなどでも放映され、ブラジルのベースボールはブラジル社会に認知されつつある。しかし、サッカーに比べると、政府の助成や企業の経済援助もない中、高額の経費を必要とするベースボールは個人経費で賄うしかないのが現状である。

移民 90 周年を終えたブラジルのベースボールは、現在でも尚、日本の野球の影響を受け続けているといえる。昨年の連盟発足 50 年の際には、高校選抜や慶應義塾大学、早稲田大学、本田技研、キューバ選抜などとの交流試合が組まれ、一方ではヤクルトスワローズがブラジルに強化キャンプを設立する事になったが、これらはブラジルのベースボールが日本の影響を受けつつある何よりの証拠である。

最後に、私はベースボールを通じて日本に多くの友人を得ることができました。それこそが日本とブラジルのますますの交流になるものと確信しております。

第12回 平成10年(1998年)10月3日

-Ein deutscher Bilderbogen-

BERND UWE KARSTEN

Text zum Vortrag "Wohin gehen die Deutsch-Japanischen Beziehungen?"

Der vorliegende Text ist eine freie Zusammenfassung des Vortrags, den ich am 3.10.1998 im Kulturzentrum von Tenri gehalten habe. Er ist daher in Wortwahl und Gliederung eine freie Wiedergabe des Inhaltes der einzelnen Themen des gehaltenen Vortrages.

I. Kurze Nachkriegsgeschichte aus deutscher Sicht

Am 8.5.1945 endete mit der deutschen Kapitulation der 2. Weltkrieg und das Dritte Reich. Für drei Jahre hatten die siegreichen Besatzungsmächte ENGLAND, FRANKREICH und die USA im Westen, die UdSSR im Osten Deutschlands die Regierungsgewalt. 1949 gründete man die Bundesrepublik Deutschland, die BRD, kurz darauf, im gleichen Jahr, entstand die Deutsche Demokratische Republik, die DDR. Damit war die spätere Teilung Deutschlands im Kern angelegt. In den fünfziger Jahren entschloß sich die Regierung der BRD zum Beitritt in der NATO, die DDR wurde daraufhin Mitglied des Warschauer Paktes. Dies waren die Akzente, die - spätestens mit dem Bau der Berliner Mauer 1961, welche auch die Stadt in zwei Teile teilte- die endgültig erscheinende Trennung der beiden deutschen Staaten besiegelte. Im Verlauf der kommenden Jahre bildeten sich zwei voneinander gänzliche Gesellschaftsformen und Gesellschaftsstrukturen aus. In der BRD prägten die "westlichen", kapitalistischen Vorstellungen von Demokratie und Marktwirtschaft das Leben und die Kultur der Westdeutschen, im "Osten", also in der DDR, waren es die marxistischen Ideen, auf denen -nach Modell der Sowjetunion und der anderen, der UdSSR angegliederten Staaten- das gesellschaftliche Leben seine kulturelle und politische Ausprägung erfuhr.

Der November 1989 brachte eine bis dahin nicht für möglich gehaltene Wende im Schicksal beider deutscher Staaten...

Perestroika und Glasnost waren die Vorboten, die der DDR, just zu ihren Feierlichkeiten zum 40. Jahrestag der DDR, das "Menetekel" an die Wand schrieben: "Wer zu spät kommt", so Michail Gorbatschow anlässlich seines Besuches in Ost-Berlin zu den Staatsfeierlichkeiten der DDR, "den bestraft das Leben!"

Mit dem unausgesprochenen Einverständnis der UdSSR fiel im November 1989 die Mauer in Berlin, wenige Monate später erfolgten die ersten freien Wahlen in der DDR, welche das Wunder der Wiedervereinigung einleiteten.

Nun möge "zusammenwachsen, was zusammen gehört", gab der ehemalige Bürgermeister von Berlin und spätere Bundeskanzler Willy Brand die Losung vor...

Jedoch-der Freudentaumel jener Nacht im November, als Ost-und Westdeutsche sich

in den Armen lagen, ist vorbei, der Traum eines schnellen und unproblematischen Zusammenwachsens beider Gesellschaften scheint ausgeträumt. Die Menschen beider Teile Deutschlands tun sich schwer, wieder zueinander zu finden. "Ick will meine Mauer wieder" steht auf vielen T-Shirts der "Ossis", "man sollte die Mauer wieder aufbauen, noch drei Meter höher als vorher!" meinen verbittert manche "Wessis".

Denn- so einfach, wie es der damalige Kanzler Kohl versprochen hatte, war es nicht mit dem Erbauen blühender Landschaften im Osten. Finanzielle Opfer auf Seiten der BRD, erhöhte Arbeitslosigkeit besonders in der ehemaligen DDR, schufen Unwillen und Frustrationen, trugen bei zum Weiterbestehen der "Mauer im Kopf".

Eine wiedervereinigte deutsche Gesellschaft, das ist eine Aufgabe nicht nur der jetzigen, sondern wohl auch noch der kommenden Generation.

II. Deutschland und Japan

Verwandte Geschichte - Verwandte Seelen?

Weit entfernt scheinen Deutschland und Japan auseinanderzuliegen, verschieden erscheinen ihre Kultur und Geschichte. Und dennoch, gerade die letzten 120, 130 Jahre deuten eine schicksalshafte Verbindung an. Die Regierung des Meiji-Kaisers versicherte sich des wissenschaftlichen und technischen Wissens und Könnens der Deutschen beim Neuaufbau einer modereren japanischen Gesellschaft. Nicht nur auf Gebieten der Medizin, der Erziehung, des Militärwesens usw. kam es zur Zusammenarbeit, sondern auch politisch, und das gerade zu unseligen Zeiten und auf unselige Weise, kam man einander näher. Dem Traum von einer Weltherrschaft der deutschen Arier entsprach das radikal völkische Sendungsbewußtsein der Japaner als "Volkes der Götter", dem nationalsozialistisch gleichgeschalteten Deutschland ähnelte das straff im Sinne eines Militarismus und Tennoismus ausgerichtete, auf eine Neubesinnung des Yamato-Damashi gegründete und geführte Japan.

Beide Länder versuchten durch totalen Krieg, ihren Anspruch auf neuen Wirtschafts- und Lebensraum durchzusetzen. Beide Länder scheiterten auf furchtbare Weise. Beide Länder erhoben sich -wie Phönix aus der Asche- zu neuer, diesmal wirtschaftlicher Größe. Beide Länder versuchen, sich als gute Demokratien zu beweisen. Beide Länder kämpfen in diesen Jahren mit ähnlichen wirtschaftlichen und gesellschaftlichen Problemen.

Die Deutschen und die Japaner seien einander ähnlich, heißt es. Und so scheint es zu sein. Düsseldorf, zweite Heimat für fast 10.000 Japaner in Deutschland, ist für die Gäste Nippons der Ort außerhalb der Heimat, wo sich Japaner am wohlsten fühlen. Und umgekehrt ist Japan, mehr denn je, Traumland für viele Touristen aus Deutschland. Beginnen in Japan jedes Jahr fast 900.000 Japaner mit dem Studium der deutschen Sprache an zahllosen Sprachinstituten und Universitäten, so ist Japanisch für viele Deutsche eine gar nicht mehr so exotische Alternative zu Französisch, Spanisch oder Russisch geworden. Kultureller Austausch, etwa Besuche von Orchestern, Theater- und Opernensembles nach beiden Seiten hin, Studenten- und

Austausch von Gastprofessoren, die Besuche zahlreicher Touristen hüten wie drüben und viele andere Aktivitäten mehr deuten ein neues Verständnis von Zusammenkommen und Kommunikation an.

Ein Symbol für diese alt-neue Freundschaft wirkt sichtbar in Berlin:

Auf dem ehemaligen Todesstreifen an der vormaligen Berliner Mauer haben japanische Kultur-Initiativen mehr als 8.000 junge Kirschbäumchen gestiftet, die dort - kurz nach dem Fall der Mauer- gepflanzt wurden. Deren junge Blüten zeigen auf wunderschönste Weise das Wachsen neuer Triebe im Verhältnis beider Kulturen und der Menschen beider Gesellschaften. Wünschen wir den Kirschbäumen und den Beziehungen unserer Länder ein weiteres, stetes und gesundes Wachstum!

III. Die Deutschen und ihre Umwelt

Deutschland ist in aller Welt berühmt für seine schönen mittelalterlichen Städte und seine romantischen Landschaften. Heidelberg oder der Schwarzwald zum Beispiel sind über die Grenzen Deutschlands und Europas hinaus auch in Amerika und in Japan bekannt und beliebt. "Ich hab mein Herz in Heidelberg verloren..." , so heißt es in einem alten Studentenlied, und tatsächlich haben viele Menschen von auswärts hier ihr Herz verloren und kommen nach Jahren immer wieder gerne zurück. Natürlich will so eine Liebe auch gepflegt werden, und die Deutschen tun viel für ihre Natur und Umwelt. Ein "grünes Bewußtsein" ist entstanden, eine Partei der Grünen ist, nur zehn Jahre nach ihrer Gründung, seit 1998 in der Regierungsverantwortung. Naturschutz, Umweltschutz, Mülltrennung etc., das sind Begriffe, die den Deutschen selbstverständlich geworden sind. In nahezu allen Haushalten wird Mülltrennung praktiziert, auf vielen öffentlichen Plätzen gibt es zahllose Container für Glas-, Plastik-, Papier- und sonstige Abfälle. Auch die Industrie macht mit: Sie verpackt ihre Waren in denkbar knapper Form, umweltfreundlich natürlich, alles Verpackungspapier muß von den Geschäften zurückgenommen werden, verbrauchte Batterien werden von den Verkaufsstellen entgegengenommen und an den Hersteller zurückgesandt.

Noch viel mehr Beispiele ließen sich nennen, kurz- der Umweltschutz in Deutschland lebt, schafft in den Menschen das Bewußtsein, daß die Umwelt ihre Umwelt ist. An den Schulen gestalten Schüler Umweltprojekte, setzen sich ein für Mülltrennung und -verwertung, an manchen Orten werden Feste für Kinder, ihre Eltern und Interessierte veranstaltet, in denen durch Spiel und Information die Notwendigkeit und der Nutzen der Liebe zur Natur vermittelt werden. Blicken wir auf Japan, so scheint es, daß Japan in dieser Beziehung weit zurück ist. Die Natur wird als gegeben erachtet, Umweltschutz findet kaum statt, Mülltrennung ist bislang noch ein Fremdwort für viele Japaner. Wünschen wir uns, daß hier die Japaner etwas von den Deutschen lernen!

IV. Besuch in einer deutschen Grundschule

Das Schulsystem in Deutschland unterscheidet sich vom japanischen in mancherlei Hinsicht. So dauert in Deutschland die schulische Ausbildung von der ersten Klasse bis zum Abitur, der Erlangung der Hochschulreife, 13 Jahre. Vier Jahre verbringen die Schüler in der Volksschule, oder "Grundschule", wie sie in Berlin heißt. Dem schließt sich -so der Wunsch und die Eignung besteht- ein neunjähriger Besuch im Gymnasium an. Der Gymnasialabschluß berechtigt prinzipiell zum Besuch jeder Hochschule. In Deutschland ist die akademische Ausbildung kostenlos, die Studenten bezahlen lediglich einen Beitrag zur studentischen Kranken- und Sozialversicherung, etwa 1000.- DM im Jahr.

Deutschland liegt mitten im Zentrum Europas, entsprechend ist seine politische Position innerhalb der EU sehr wichtig geworden. Aus diesen Umständen ergibt sich, daß im Curriculum der deutschen Schulen der Vermittlung von Sprachkenntnissen große Bedeutung beigemessen wird. Bis vor wenigen Jahren hatte man in der vierten Klasse der Volksschule mit dem Englischunterricht begonnen, dem im Gymnasium dann der Unterricht in Französisch und Latein folgte. Sprachinteressierte können in einer Arbeitsgemeinschaft eine weitere Sprache hinzunehmen. Beliebt sind etwa Spanisch oder Russisch, aber auch Japanisch wird mehr und mehr gewählt. Seit kurzem beginnt der Englischunterricht an den Volksschulen bereits in der zweiten Klasse, die Kinder lernen also eine Fremdsprache in einem Alter, in dem sie besonders aufnahme- und lernfähig sind. Natürlich wird der Sprachunterricht (von einem deutschen Lehrer oder Lehrerin) in der neuen Fremdsprache gehalten. Die Kinder gewöhnen sich von Anfang an daran, ihre Fragen, Antworten und sonstige Äußerungen in der neuen Fremdsprache zu formulieren. Wer eine deutsche Schule besucht, wird feststellen, daß die Schüler keine Uniform tragen, daß sie sich frei geben, daß auch ihre Lehrer/innen recht locker und garnicht "akademisch" sind.

Ein Blick auf Japan zeigt, daß hier die Schüler erst im relativ späten Alter mit einer Fremdsprache beginnen. Eine zweite oder dritte Fremdsprache ist im regulären Curriculum bisher noch nicht vorgesehen. Wäre hier das deutsche Fremdsprachenmodell nicht interessant für das Inseiland Japan?

V. Feste in Deutschland

Feste spielen, wie wohl in jedem Land, so auch in Deutschland eine große Rolle. Neben den privaten Festlichkeiten wie Geburtstag, Hochzeit, Taufe sind es vor allem Ostern und besonders Weihnachten, die im Jahresablauf der Deutschen echte Höhepunkte sind. Wenn es auch ursprünglich religiöse Feste waren (und immer noch sind), so ist doch in den letzten Jahrzehnten der private, weltliche Aspekt stärker geworden. Weihnachten, das ist vor allem anderen das "Fest der Familie", des privaten Friedens, des Zusammenkommens und des Einander Gedenkens und Bedenkens. Mit der Romantik und der Entwicklung des deutschen Bürgertums

entwickelte sich auch eine bürgerliche Weihnachtskultur. Seit dem letzten Jahrhundert steht in fast allen Häusern (und nicht nur da, sondern auch auf öffentlichen Plätzen und in zahlreichen Vorgärten) der deutsche Weihnachtsbaum. Man singt zu Herzen gehende Weihnachtslieder; so kennt die ganze Welt "Stille Nacht, Heilige Nacht" (Silent Night) oder "O Tannenbaum". Auch der Weihnachtsmann, oder das Christkind, -je nach Region- besucht die Familien und beschenkt die braven Kinder. Aber nicht nur auf die Kinder ist das Schenken beschränkt, auch die Erwachsenen beschenken sich, und tun dabei manchmal des Guten etwas zu viel...Je nach Region, je nach religiöser Gläubigkeit, gehen die Menschen am Heiligabend in den Gottesdienst oder die Christmette. Und abhängig von diesen Elementen des Festes, nämlich Bescherung und Gang zur Kirche, ist ein weiterer Höhepunkt: Das festliche Weihnachtsessen am Heiligabend. Neben den Geschenken gibt es natürlich für jeden einen "bunten Teller", voll mit Süßigkeiten und nach den verschiedensten Gewürzen Arabiens duftendem Weihnachtsgebäck. Apropos Weihnachtsgebäck: Der typische Weihnachtskuchen ist der Christstollen, der -in Gestalt eines Wickelkindes- seit dem Mittelalter geschätzt wird. Wen wundert es, wenn nach den Festtagen die Waage bei jedem wieder einige Kilogramm Gewicht mehr anzeigt? Kurz, Weihnachten ist das Fest, und wenn Sie Gelegenheit haben, bei einer deutschen Familie zu Weihnachten eingeladen zu werden, dann genießen Sie diese unvergleichlichen Stunden!

VI. Wo ist es schön in Deutschland?

Überall! Nur, die Frage ist: Wann fahren Sie? Was mögen Sie, die Städte? Die Landschaften? Deutschland ist im Winter recht kalt, es kann bis zu minus 15 Grad C kalt werden. Der Sommer ist nicht so heiß wie in Japan, daher als Reisezeit sehr angenehm. Lieben Sie Wein? Dann machen Sie eine Rheinreise mit dem Schiff entlang die berühmten deutschen Weinstädtchen. Lieben Sie Bier und deftiges Essen? Dann fahren Sie nach Bayern und besuchen Sie München und sein Hofbräuhaus. Sind Sie romantisch veranlagt? Dann fahren Sie die Romantische Strasse entlang oder die Märchenstraße und besuchen Sie die zahlreichen wunderschönen mittelalterlichen Städte.

Haben Sie keine Angst vor den Deutschen! Die meisten sind freundlich und mögen Japaner! Einen guten Tip vielleicht:

Lernen Sie ein paar freundliche Sätze auf Englisch oder Deutsch. Sprache ist -überall- ein Schlüssel zum Herzen der Menschen!

あるドイツの情景アーチ

著：国際文化学部 ヘルント・ウーゲー・カステン

訳：国際文化学部 中川義英

「独日関係いずこへ」の講演のテキスト

本テキストは、私が1998年10月3日に天理市文化センターで行った講演を自由に要約したものである。それゆえ言葉の選択と構成の面で実際行った講演での個々のテーマの内容を自由に再生した。

ドイツ人の見た戦後史概略

1945年5月8日のドイツの降伏で第二次世界大戦と第三帝国は終わった。3年の間戦勝国のイギリス、フランス、アメリカがドイツの西側で、ソ連がドイツの東側で統治権を持った。その後すぐ1949年に西ドイツ、つまりドイツ連邦共和国（BRD）が、それに続いて同年東ドイツ、つまりドイツ民主共和国（DDR）が誕生した。それが後のドイツ分割を招く源となった。50年代にドイツ連邦共和国政府はNATO（北大西洋条約機構）加盟を決定した、それをうけてすぐさまドイツ民主共和国はワルシャワ条約機構の一員となった。これらはその後ベルリン市をも二分した1961年のベルリンの壁構築と共に両ドイツ国家の決定的と思われる分割を確定したことを強調した。次第に年数を重ねるうちに二つの互いに独立した社会形態と社会構造が成立していった。ドイツ連邦共和国では民主主義と市場経済という「西側の」、資本主義の観念が西ドイツ人の生活と文化を作り出し、「東」、つまりドイツ民主共和国ではソ連やソ連併合国家である他国のモデルに従ってマルクス主義理念が社会生活の文化と政治面に強い印象を与えた。

1989年11月には両ドイツ国家の運命上これまで不可能とされていた転換がもたらされた。ペレストロイカ（再改革）とグラスノーチェス（情報公開）は次のような兆候であった、その兆候というのは、おりしも建国40周年記念を祝っていたドイツ民主共和国の壁に書かれた「警告」であった：「遅れし者は時代に取り残される。」とミハイール・ゴルバチョフがドイツ民主共和国の国家祝祭時の東ベルリンの訪問をきっかけに言った。

ソ連の無言の了解で1989年11月にベルリンの壁は崩壊した。数ヶ月後には再統一の奇跡を導いたドイツ民主共和国での初めての自由選挙が行われた。

さて「みんなのものは、みんなで育てよう」という合言葉をかつてのベルリン市長で、後のドイツ連邦首相ヴェーリー・ブランドが述べた...

しかしながら、11月の東西のドイツ人たちが抱擁し合った喜びの酔いしれは過ぎ去り、両社会の早くて、問題のない一体化の夢は興醒めしたように思われる。両方のドイツ人は、再びはっきりと互いを意識するように思うことがそう簡単にやって行けなくなっている。「私は自分のためにまた壁を築きたい」と「旧東ドイツ人」の多くのTシャツにプリントされているし、「壁を再び構築せよ、しかも今までよりは3メートル高いのを」とかなりの「旧西ドイツ人」は憤懣を抱いて言っている。というのは、東側の活気あふれた地方行政区の建設に関して、当時のコール首相が約束していたほど簡単にははかどらなかったからである。ドイツ連邦共和国側での財政上の犠牲、つまり、特にかつてのドイツ民主共和国での失業増加は憤懣とフラストレーションを創り出し、「頭の中の壁」の存続に貢献した。再統一された一つのドイツ社会、これは現在のみならず、たぶん次世代の課題でもあろう。

II ドイツと日本 似た歴史 似た精神？

ドイツと日本はお互いにはるかに遠く離れているために、両国の文化と歴史は異なっているようにおもわれる。にもかかわらず、正しく最近の 120、130 年間は運命的なつながりをそれとなく示している。明治天皇の政府は近代的な日本社会を新たに建設する際にドイツ人の学術的、技術的な知識と能力を確保した。医学、教育、兵制等の分野で協力しただけでなく、政治的にもそうであった、そしてこのことは正に不幸な時代に、不幸な方法で互いに相接近した。ドイツのアーリア人の世界支配の夢と相応したのが「神々の民」としての日本人の極端な民族的な使命感であった。国家社会的に統制されたドイツに似かよったのが軍国主義と天皇制に則って厳しく実行された、大和魂という新意識に基づき、導かれた日本であった。

両国は総力戦によって新しい経済ならびに生活空間への要求を遂行しようと試みた。両国はひどい方法で失敗した。両国は 灰の中から不死鳥のように 立ち上り、今度は新しい経済大国となった。両国は自らを良き民主主義の手本となることを試みている。両国はこの数年間似かよった経済ならびに社会問題と戦っている。

ドイツ人と日本人は互いに似ていると言われている、そう思える。ドイツ在住のほぼ 1 万人の日本人の第二の故郷であるデュッセルドルフは日本の客人にとって、日本を一番好ましく感じている故郷外の場所である。そして逆に日本は以前よりはいっそうドイツからの多くの観光客にとっての夢の国である。日本で毎年 90 万の人が多数の語学研修所や大学でドイツ語の勉強を始めると、日本語は多くのドイツ人にとってフランス語、スペイン語あるいはロシア語への新しい可能性からするともうまったくエキゾチックな言葉でなくなっている。文化交流、例えば両国相互へのオーケストラ、劇場アンサンブル、オペラアンサンブルの訪問や学生ならびに客員教授の交換、双方からの多数のツーリストの訪問や多くの他の活動が出会いとコミュニケーションの新しい理解をそれとなく示している。この古くて新しい友好のシンボルはベルリンではっきりと効果をあげている。以前のベルリンの壁沿いのかつての死の地帯に日本の文化の先導者が 8 千本の桜の若木を寄贈した、それらはそこで 壁の崩壊後すぐに 植えられた。その桜の若い花が最もすばらしく美しい草地で、両社会の両方の文化と人間のつながりにつままれて新たなる推進の育みを示している。私たちの国々の桜の木と関係にさらなる、変わることはない、健全な成長を願おう。

III ドイツ人と環境

ドイツは美しい中世の都市やロマンチックな景色で世界中に知れわたっている。例えばハイデルベルクとかシュヴァルツヴァルトはドイツとヨーロッパの国境を越えてアメリカや日本にも知られ、人気がある。「僕はハイデルベルクに心を奪われた…」と古い学生歌に唄われている。事実他からくる多くの人はここでうっとりとし、数年後にまた喜んで戻ってくる。もちろんそういう愛情も養われる。だからドイツ人は自然と環境のために多くの事をする。人々の心の中に「緑の意識」が生まれ、政党としての「緑の党」が活躍している。その党は旗揚げ後 10 年しか経過していないが、1998 年から政府としての責任も自覚している。自然保護、環境保護、ごみの分別等、これらはドイツ人にとって自明の概念となっている。ほぼ全ての家庭でごみの分別がなされている。多くの公共の場にはガラス、プラスチック、紙、その他のごみ用のコンテナがたくさんある。企業も協力している：企業は商品を考えられる限り、簡素な形で包装する、もちろん環境にやさしく。全ての包装紙は店が回収しなくてはならない。使用済みの電池は販売店に回収され、製造元へ送り返される。

さらにたくさんの例が挙げられる、要するに環境保護はドイツでは生きているのである、人々の中では環境は自分たちのものであるという意識が根付いているのである。学校で形成された生徒た

ちの環境プロジェクトはごみの分別およびごみの利用に尽力している。かなりの場所で子供たちや、親たちや関心のある人たちのためにゲームやインフォメーションを通じて自然愛への必然性や有用性が伝えられるイベントが開催されている。日本に目を向けると、日本は環境保護に関してははるかに後戻りをしていると思われる。自然は与えられたものとみなされている、環境保護はほとんど行われていない、ごみの分別はこれまで日本人にとってはまだ未知の言葉である。この点では日本人はドイツ人から何かを学んでもらいたいと願う。

Ⅳ ドイツの学校教育について

ドイツの学校制度はいろいろな点から見ても日本の制度とは異なっている。ドイツの学校教育は1年から高等学校卒業証明書への到達であるアビトゥーアまで13年間続く。生徒たちは4年間国民学校または、ベルリンで呼ばれている「基礎学校」で教育を受ける。それに続くのが望みと能力があれば9年間の中・高等学校の教育である。中・高等学校修了は原則的にはどの大学でも勉強する権利を得る。ドイツの大学の学費は無料である。学生は学生疾病保険ならびに社会保険の分担金年間約1,000マルク（凡そ7万円）を支払うだけである。

ドイツはヨーロッパの中央にある。それによりヨーロッパ共同体(EU)内部のドイツの政治的位置は非常に重要となった。そういう事情から明らかになっていることは、ドイツの学校のカリキュラムでは語学知識の媒介に非常に重きが置かれていることである。二、三年前までは国民学校の4年生では英語授業が始まっていた、その後英語授業に続いたのが中・高等学校のフランス語とラテン語の授業であった。語学に関心のある人たちは事業団体が別の語学をその他に取ることが出来る、例えばスペイン語とかロシア語は人気がある。しかし日本語も選択率はますます高くなっている。少し前から国民学校の2年生ですでに英語の授業が始まっている、つまり子供たち、特に受け入れおよび学習能力のある年齢では外国語を学んでいる。もちろん語学授業は(ドイツ人の教員によって)新しい外国語を用いて行われる。子供たちは初めから自分たちの質問、答え、その他の表明を外国語で行うことに慣れている。ドイツの学校を訪問する人は、生徒たちが制服を着用していないこと、自由に振舞っていること、教員も本当にゆったりしていて、全然学者ぶっていないことを確信するであろう。

日本を見ると、生徒たちは比較的年齢が上がってからはじめて外国語を学び始める。第2語学あるいは第3語学が今まで正規のカリキュラムでは見られたことはない。ドイツの語学モデルは日本という島国にとっては関心がないのだろうか。

ドイツの祭り

多分どの国にもある様に、ドイツでも祭りは重要な役割を果たしている。誕生日、結婚式、洗礼のような私的な祝い事の外にとりわけドイツ人の一年の終わりでの真のクライマックスであるのは復活祭や特にクリスマスである。もともと宗教的な祭りであったが(そして今なおそうであるが)やはり最近数十年では私的で、世俗的な色彩がより濃くなってきている。クリスマス、これはとりわけ「家族の祭り」、私的な安らぎの祭り、お互いの追憶と熟慮の祭り、集いの祭りである。ロマン主義とドイツ市民階級の発展と共に市民のクリスマス文化も発展した。前世紀からほぼどの家でも(そこだけではなく、公共の場でも、そして前庭でも)ドイツのクリスマスの木が立っている。心にじーンとくるクリスマスの歌を唄う、世界中の人が知っている「清しこの夜...(Silent Night)」あるいは「もみの木」を。サンタクロースあるいは幼子キリストもそれぞれ宗教に応じて家庭を訪問し、行儀の良い子にプレゼントをする。しかし、贈り物は子供たちだけではなく、大人も互いにプレゼントを贈り合う、そしてその際時々飲み過ぎることもある...宗教に応じて、宗教的

な信心に応じて人々は聖なる晩に礼拝に、あるいはクリスマスミサに行く。祭りのこういった要素、つまり贈り物を渡すことや教会へ行くことにかかっているのは別のクライマックスである：聖なる夜の豪華なごちそうである。贈り物の外にももちろんの人にとってもお菓子をいっぱい盛った「色彩豊かな皿」とアラビアの香辛料の匂いのするクリスマスクッキーがある。このクッキーのことをついでに述べる：典型的なクリスマスのお菓子は 赤ん坊の形をしていて クリスマスシュトレといわれ、中世以降珍重されているものである。祭りの日々後、体重計はどの人のところでも再び2,3キロ以上の重さを示す場合、誰が驚くだろうか。要するにクリスマスが祭りなのであり、あなたがクリスマスの頃にドイツ人の家庭に招かれる機会があれば、この比類のない時間を楽しんでください。

Ⅶ ドイツはどこが美しいか。

いたる所！ ただ、尋ねたいことはこうである：あなたはいつドイツへ行きますか。何が好きですか、都市ですか。景色ですか。ドイツでは冬は本当に寒い、気温はマイナス15度まで下がることもある。夏は日本ほど暑くない、だから旅行時期としては非常に快適である。あなたはワインがお好きですか。それなら船に乗って有名なドイツのワインの都市に沿って行くライン河の旅をお勧めしたい。ビールと栄養たっぷりの食事が好きですか。それならバイエルンへお出かけ下さい、ミュンヘンやホーフブレイハウスを訪ねて下さい。あなたはロマンチックな気分になりたいですか。それならロマンチック街道に沿って、あるいはメルヒェン街道に沿って旅をし、たくさんのすばらしく美しい中世の城を訪ねて下さい。

ドイツ人に不安を抱かないで下さい。たいていの人々は日本人が好きです。ひょっとするとこれはすばらしいヒントになるかもしれません：二、三の友好的な表現を英語かドイツ語で学んで下さい。言葉は どこでも 人々の心を開く鍵なのですから！



พุทธศาสนาและอาหารการกิน : อุปนิสัยบางประการของคนไทย (บทคัดย่อ)

ไซติรส โกวิทวัฒน์พงศ์

พุทธศาสนาเป็นเอกลักษณ์สำคัญในวัฒนธรรมไทยที่มีอิทธิพลมหาศาลต่อชีวิตของคนไทย. อิทธิพลนี้ไม่ได้สะท้อนให้เห็นจากการเคารพบูชาพระรัตนตรัยเท่านั้น แต่ยังมีฝังลึกลงไปเป็นพื้นฐานของจิตใจ โลกทัศน์ การกินอยู่ การรวมเป็นหมู่เป็นคณะ กิริยามารยาทในสังคม ตลอดจนการสร้างสรรคศิลปะวิทยาแขนงต่างๆของคนไทย. ในประวัติศาสตร์การปกครองของชนชาวไทยที่สืบขึ้นไปได้ถึงยุคสุโขทัยนั้น(ต้นคริสต์ศตวรรษที่13) มีเอกสารลายลักษณ์อักษรแล้วอย่างชัดเจนว่า ชาวไทยนับถือพุทธศาสนา มีการไปวัด ฟังเทศน์ สวดมนตร์ ทำบุญใส่บาตร. ผู้นำของประเทศเรียกกันว่า พ่อเมือง. ศีลธรรมพุทธศาสนาเป็นแบบฉบับในการดำรงชีวิตของประชาชนและกลายเป็นพื้นฐานของกฎหมายไทยไปด้วยในที่สุด. พ่อเมืองซึ่งต่อมาเรียกว่า พระมหากษัตริย์ เป็นผู้รับหน้าที่ปกครองบ้านเมือง, เป็นผู้ที่มีการศึกษา, มีความรู้ความประพฤติดี, มีศีลธรรมที่จะค้าเงินและจรรโลงสังคม. คติของการเป็นพระมหากษัตริย์ในไทยจึงเป็น "ธรรมราชา". ถ้าพระมหากษัตริย์เป็นคนดีมีศีลธรรม, บ้านเมืองจะอยู่เย็นเป็นสุข. ตามคตินี้ พระมหากษัตริย์เป็นสมมุติเทพเท่านั้น คือเป็นคนธรรมดาที่ได้รับความยกย่องนับถือมากเหมือนเทพ, ไม่ใช่เป็นอวตารของเทพเจ้าหรือ "เทวราช" ตามคติของฮินดูหรือตามคติอียิปต์. พระมหากษัตริย์ไทยผู้ทำคุณงามความดีให้แก่แผ่นดินอย่างมากมาย่อมเป็นที่รักเคารพและเทิดทูนเหนือหัวของคนไทย และเมื่อพระองค์เสด็จสวรรคต พระองค์ก็จะกลายเป็น "เทวราช" เป็น "พระสยามเทวราช" ผู้จะปกป้องคุ้มครองแผ่นดินไทยต่อไปอีก ซึ่งอาจมีหลายองค์เหมือนเทพเจ้าผู้รักษาทิศทั้งสี่. นี่เป็นข้ออธิบายว่าทำไมพระบาทสมเด็จพระจุลจอมเกล้าเจ้าอยู่หัวจึงทรงเป็นที่เคารพกราบไหว้บูชาติดต่อกันมาจนถึงทุกวันนี้อย่างไม่เสื่อมคลาย เพราะจากที่ทรงเป็นธรรมราชาในขณะที่ทรงมีพระชนม์ชีพ พระองค์ได้กลายเป็นพระสยามเทวราชเมื่อทรงสิ้นพระชนม์.

พุทธศาสนาได้วางแนวค่านิยมที่ดีในการอยู่ร่วมกันในสังคม เช่น สนับสนุนไม่ให้มีการแบ่งชั้นวรรณะ ให้ถือความเสมอภาค เพราะชาติตระกูลไม่ได้เป็นสิ่งวัดความดีของคน. และได้เน้นว่าอุปนิสัยใจคอของคนไทยอย่างไม่มีอะไรมาเทียบได้. อุปนิสัยที่เด่นชัดเช่น

1. คนไทยเชื่อในเรื่องกฎแห่งกรรมมาก และนิยมการทำบุญทำทาน. การทำบุญของคนไทยเพื่อจุดมุ่งหมายสำคัญสามประการ คือ a). เพื่อสั่งสมบุญให้ตัวเองเพื่อความสุขความเจริญในชาตินี้และชาติหน้า. b) เพื่ออุทิศบุญแก่บรรพบุรุษ หรือผู้รู้จักไม่ว่าจะยังมีชีวิตอยู่หรือไม่เหมือนให้ของขวัญแบบหนึ่ง, หรือเหมือนการต่อความสุขให้แก่ชีวิตคนนั้น. c) เพื่ออุทิศแก่ "เจ้ากรรมนายเวร" เพื่อเซ่นผีหรือแก้เคล็ด นั่นคือเพื่อรับผิดและขอขมาแก่ผู้ที่เราเคยทำร้ายเขาในอดีตชาติ.

กิจการเกี่ยวกับการทำบุญที่นิยมกัน นอกจากการใส่บาตรปอຍยังมีการปล่อยนก ปล่อยปลา ปล่อยเต่า ปล่อยวัว. การปล่อยสัตว์นี้คือการช่วยชีวิตสัตว์จากการถูกฆ่ากิน. และเมื่อปล่อยสัตว์อะไรแล้ว ก็จะพยายามไม่กินสัตว์นั้นเป็นอาหารอีก. นอกจากนี้ก็มี การทำบุญหล่อพระพุทธรูป, สร้างและบูรณะวัดวาอาราม, บริจาคเป็นค่าอาหารค่ายาแก่พระภิกษุสามเณร, คนที่ป่วยเป็นโรคอะไร จะบริจาคเงินเพื่อเป็นค่ารักษาพยาบาลช่วยเหลือคนป่วยอนาถาที่เป็นโรคเดียวกันเป็นต้น. อย่างไรก็ตามคนไทยรู้ว่ากุศลกรรมและอกุศลกรรมไม่สามารถลบล้างกันได้ ในคติของพุทธ. ใครทำดียอมได้ดี ทำชั่วยอมได้ชั่ว. ตามสำนวนที่ว่า "บุญทำกรรมแต่ง". คตินี้ยังคงเห็นได้อย่างชัดเจนในภาษาและสังคมไทย. ความเชื่อนี้ยังแสดงให้เห็นว่าในส่วนของลูกของคนไทย มีความกลัวแอบแฝงอยู่มาก. กลัวไม่มีความสุข, กลัวความสุขที่มีจะลดลง, กลัวเหตุเภทภัยที่สืบเนื่องจากกรรมเก่าเป็นต้น. การที่มีความกลัวก็เพราะมีความรักชีวิตมากด้วยนั่นเอง. ในแง่หนึ่ง การที่พุทธศาสนาเจริญมากที่สุดในประเทศไทยแสดงว่าคนไทยซื่อกลัวมากกว่าชนชาติอื่น และเป็นชนชาติที่ผูกพันอยู่กับความสุขทางโลกมากกว่าด้วย, ซึ่งจะเห็นได้ง่ายๆจากนิสัยคนไทยส่วนใหญ่ที่มักจะเป็นคนเสียตายของ ไม่เคยทิ้งสิ่งของในบ้านอะไรเลย แม้ว่าจะเป็นของเก่าของเหลือที่ไม่มีค่าใดๆก็ตาม ก็จะไม่ทิ้งไว้จนรกเต็มบ้าน. ความผูกพันนี้ยังมีต่อไปหลังตาย เรื่อง "บุญโสมเผ่าทรัพย์" ก็รู้จักกันทั่วไป.

2. คนไทยเคารพบูชาพระพุทธรูป, พระสงฆ์, และรูปเคารพ(เช่น รูปปั้น ภาพถ่าย) ศาลเจ้า, ศาล

ผี, ศาลพระภูมิ, ศาลพระพรหม. สัญลักษณ์ศักดิ์สิทธิ์ต่างๆ, เช่นธรรมจักร, รอยพระพุทธรูปบาท, เครื่องรางของขลัง, รวมทั้งต้นไม้ใหญ่ๆ เช่นต้นโพธิ์ ต้นไทร ต้นตะเคียน จอมปลวกเป็นต้น. ในที่สุดดูเหมือนว่าไสยศาสตร์จะครอบครองจิตสำนึกของคนไทยมากกว่าคำสอนในพุทธศาสนา, นี่ก็เพราะความกลัวและการขาดสติยังคิดหาเหตุผลนั่นเอง. จึงหวังพึ่งสิ่งที่อยู่เหนือธรรมชาติให้มาช่วยตน. และปล่อยให้คนไทยชอบไปหาหมอดูหรือไปดูดวงตามแบบโหราศาสตร์ หรือดูดวงชะตาจากไพ่ป๊อ, จากเส้นสายมือ, เส้นสายฝ่าเท้า, หรือการไปเสี่ยงเซียมซีตามวัดที่มีชื่อเสียง, รวมทั้งการจัดการที่อยู่อาศัยและที่ทำงานตามศาสตร์ของ Feng-Shui จีน. ความเชื่อไสยกลางของคนไทย ทำให้คนไทยพร้อมที่จะลงทุนเข้าพระพุทธรูปที่ขึ้นชื่อว่าศักดิ์สิทธิ์มีภูษากราบไหว้เป็นส่วนตัว แม้ว่าราคาจะแพงอย่างไรก็ตาม เพื่อเป็นสิริมงคลแก่ตัวเองและครอบครัว. นี่เองที่ทำให้เกิดมีพุทธพาณิชย์ขึ้นมา กลายเป็นธุรกิจแบบหนึ่งในเมืองไทย. คนไทยทั้งชายและหญิงมักสวมสร้อยคอ(ทอง)แขวนพระติดตัว บางทีก็มีมากถึงสี่ห้าองค์. หัวคนเป็นส่วนสูงที่สุดและสำคัญที่สุดของร่างกายคน. นอกจากจะเป็นที่ตั้งของสมองแล้ว ยังเป็นที่สถิตของพระ, ของเทพที่ตาคนมองไม่เห็น. ในศิลปศาสนาต่างๆ บัญญา อำนวยพิเศษ ความเป็นพระเจ้า เป็นเทพ ความศักดิ์สิทธิ์ มักจะแสดงออกมาเป็นแสงสว่างที่เรืองรองออกจากศีรษะ. ในพุทธศิลป์ จะเป็นรูปเปลวเพลิงออกจากเศียรพระพุทธรูปเช่นกัน. นี่เป็นข้อยืนยันข้อหนึ่งถึงความสำคัญของศีรษะในวัฒนธรรมส่วนใหญ่. คนไทยจึงไม่ตบหัวตีหัวหรือแม้แต่แตะต้องหัวของกันและกัน, ไม่ว่าจะเป็นการหยอกล้อเล่น หรือการตบตีโมโหโกรธกันจริงๆก็ตาม. เพราะฉะนั้นถ้าใครไปแตะหัวคนไทยล่ะก็ ต้องเกิดเรื่องชกต่อยกันแน่. คตินี้ก็เหมือนกันที่เป็นสิ่งกำหนดมารยาทในการยื่นการนึ่งในหมู่คนไทย. นั่นคือผู้มีอาวุโสน้อยกว่าจะยื่นหรือนั่งเหนือระดับศีรษะของผู้ที่มีอาวุโสมากกว่าไม่ได้. เช่นผู้ใหญ่นั่งอยู่ จะเข้าไปยืนใกล้ๆ ยืนท่อมหัวผู้ใหญ่ ไม่ได้ จะต้องนั่งลงทันที. ถ้าผู้ใหญ่นั่งอยู่บนพื้น ผู้อ่อนอาวุโสกว่าจะต้องนั่งลงบนพื้นต่ำกว่า, ถ้าไม่มีพื้นที่ระดับต่ำกว่า ก็ต้องนั่งห่างออกไปน้อมตัวลงนิดๆด้วย. (การเชื่อไสยกลางในหมู่คนไทยมีมากและครอบงำชีวิตประจำวันของคนไทยจนเหมือนกฎความประพฤติแบบหนึ่ง เช่น จะไม่สวมเสื้อผ้าสีดำถ้าพ่อแม่ตนยังมีชีวิตอยู่. สีดำเป็นสีไว้ทุกข์ของคนไทย. จะไม่ตัดผมวันพุธ. จะไม่ให้ผ้าเช็ดหน้าแก่กันเพราะผ้าเช็ดหน้าถือว่าใช้ดับน้ำตามาก

กว่าอย่างอื่น. เดิมในสมัยที่มีการเคี้ยวหมากพลู จะมีผ้าเช็ดปาก. ปัจจุบันหันมาใช้กระดาษทิชชูเช็ดกันส่วนใหญ่. จะไม่ให้ของแถมคมแก่ใคร เพราะกลัวว่าผู้ให้กับผู้รับจะบาดหมากกันในอนาคต ถ้าเกิดมีความจำเป็นชนิดหลีกเลี่ยงไม่ได้ ที่จะต้องรับของมีคมทั้งหลายจากใคร ก็จะต้องยื่นคະຍອให้ผู้ให้รับเงินเล็กน้อยไว้ให้เป็นการแลกเปลี่ยน. นี่เป็นการแก้เคล็ดอย่างหนึ่งเพื่อเปลี่ยนจากการรับดาบให้เป็นการซื้อขายไปเสีย เช่นนี้คนไทยเชื่อว่าจะไม่มื้อบาดหมากใจเกิดขึ้นได้ระหว่างผู้ให้กับคนไทยผู้ต้องรับเพื่อรักษามารยาทสังคม.)

3. พุทธศาสนายังสอนให้คนไทยตั้งอยู่ในทางสายกลาง ให้เคารพสิทธิและความเชื่อของคนอื่นๆ. นี่ก็เป็นสิ่งที่เห็นได้ชัดเจนในประวัติศาสตร์ไทย. สมัยที่มีชาวตะวันตก(ชาวฮอลันดา ชาวอังกฤษ โปรตุเกส หรือฝรั่งเศส)เดินทางไปถึงคาบสมุทรอินโดจีนในยุคศตวรรษที่ 17 นั้น นอกจากผลประโยชน์ทางการค้าแล้ว ชาวตะวันตกเหล่านี้ยังต้องการไปเผยแพร่คริสต์ศาสนาอีกด้วย. ตอนนั้น ประเทศไทยก็ยอมเปิดให้พวกมิชชันนารีเข้าไปตั้งสอนศาสนาได้โดยดีอย่างสงบ ไม่ให้มีการบังคับให้คนเชื่อตาม แล้วแต่ใครจะสมัครใจ. ความใจกว้างในด้านความเชื่อนี้ทำให้ประเทศเราลดปัญหาขัดใจกับชาวตะวันตก และทำให้พวกเขาไม่คิดที่จะใช้กำลังมาบังคับเรา. และนี่เป็นเหตุผลหนึ่งที่ทำให้ประเทศไทยไม่เคยตกไปเป็นเมืองขึ้นของชาวตะวันตก. ความใจกว้างในเรื่องของศรัทธาความเชื่อยังคงมีอยู่ตลอดมาจนทุกวันนี้. ตามกฎหมาย ทุกคนมีสิทธินับถือศาสนาใดก็ได้. เราไม่มีปัญหาศาสนา หรือมีก็น้อยมากจริงๆ. คนไทยนับถือบูชาท้าวมหาพรหม-คติของศาสนาฮินดู, บูชาเจ้าแม่กวนอิม-คติพุทธแบบจีน, บูชาพระญี่ปุ่นหรือพระผู้เป็นเจ้า(ที่เมืองไทยก็มีศูนย์สอนศาสนาของเทนรีเคียวด้วย)เป็นต้น. คำกล่าวสวดมนต์อ่อนหวานหรือคำให้ศีลให้พรในหมู่คนไทย ก็จะเอ่ยในทำนองนี้ว่า **“ขออัญเชิญสิ่งศักดิ์สิทธิ์ทั้งหลายในสากลโลก ช่วยดลบันดาลให้...”**. การนับถือบูชาสิ่งศักดิ์สิทธิ์ต่างๆพร้อมๆกันได้นี้ เป็นไปแบบธรรมชาติที่สุด เพราะนั่นคือความรู้สึกเนื้อแท้ของคนที่ยกแล้ว, คนที่ต้องการผู้คุ้มครอง, คนที่มีความหวังและคนที่รักชีวิต จึงอยากจะเชื่อว่าสิ่งศักดิ์สิทธิ์จะบันดาลให้ได้ตามที่ปรารถนา เพราะเป็นสิ่งที่มีความน่าเชื่อถือกว่ามนุษย์เดินดินธรรมดาและเหนือกว่าอำนาจธรรมชาติด้วย.

การทำบุญของคนไทยที่ต่างกันเป็นประจำคือการใส่บาตร หรือคือการให้อาหารแก่พระภิกษุสงฆ์. พระสงฆ์เป็นผู้สืบพระศาสนา, เป็นผู้ที่คนไทยถือว่าอยู่เหนือกว่าคนเดินดินธรรมดา, มีคุณธรรมสูงกว่า, มีสติปัญญาเหนือกว่า, เป็นความสว่าง, เป็นผู้นำทางใจแก่ชาวพุทธทุกคน. การให้อาหารแก่พระ จึงเป็นการทำบุญและทำทานไปพร้อมกัน, เป็นการทำความดีตามคำสอนในพุทธศาสนา. อาหารที่ใส่บาตรถวายพระ ก็จะพยายามเลือกอาหารที่ดีไปถวาย, และเป็นอาหารที่เจ้าตัวชอบด้วยเป็นส่วนใหญ่. ทั้งนี้เพราะคนไทยยังเชื่อว่าการกระทำนี้จะยังผลให้ตนเองมีอาหารการกินอุดมสมบูรณ์ทั้งในชีวิตนี้และชีวิตหน้า. เหมือนเป็นการเก็บตุนอาหารอร่อยๆสำหรับตนเองในอนาคต. นี่เป็นความเชื่อที่อยู่นอกเหนือกรอบดั้งเดิมของพุทธศาสนา. เป็นตัวอย่างที่ชัดเจนตัวอย่างหนึ่งที่โยงไปถึงอุปนิสัยรักการกินของคนไทยที่สำคัญไม่ยิ่งหย่อนไปกว่าความเชื่อในศาสนา. คนไทยจึงไม่เพียงแต่เฝ้าถึงเรื่องกินในแต่ละมื้อแต่ละวัน ยังนึกถึงต่อไปในอนาคต, ไปถึงชีวิตภพหน้าอีกด้วย. นี่เป็นเอกลักษณ์สองอย่างที่เด่นที่สุดของคนไทย : ความเชื่อในศาสนากับความรักกิน. นอกจากการใส่บาตรแล้วยังมีการเซ่นไหว้ด้วยอาหาร, จะทำเมื่อไหว้พระ, ไหว้เจ้าเช่นพระภูมิเจ้าที่, เจ้าป่า, เจ้าเขา, เจ้าถ้ำ, เทพารักษ์ประจำต้นไม้ใหญ่ หรือ นางไม้, เทพธิดาประจำข้าวแม่โพสพ และไหว้บรรพบุรุษ. การเซ่นไหว้ด้วยอาหารคงจะรับอิทธิพลจากธรรมเนียมจีนมาแต่โบราณ, จากการจัดอาหารเป็นชุดเล็กหรือชุดใหญ่สำหรับนำไปวางหน้าหลุมฝังศพที่สุสาน. ชาวจีนยังคงทำกันต่อมาถึงทุกวันนี้ และชาวไทยก็ทำตามแบบมาเรื่อยๆเช่นกัน. เช่นเมื่อเซ่นไหว้บรรพบุรุษในวันสิ้นปีก่อนวันตรุษจีน จะเป็นอาหารชุดใหญ่ มีหมู เป็ด ไก่ ฟ่าน กุ้ง ปู ปลาเป็นตัวๆเลยก็เดียว. อาหารทั้งหมดปรุงพร้อมรับประทาน, ร้อนๆเลยก็เดียว. ในปัจจุบันมักจะเซ่นไหว้ภายในบ้าน ลูกๆหลานๆจะจุดธูปเทียนไหว้และเชิญดวงวิญญาณบรรพบุรุษมารับประทานอาหาร(และขอพรจากบรรพบุรุษด้วย). ทั้งระยะเวลาไว้นานประมาณหนึ่งชั่วโมงเมื่อธูปและเทียนเผาไหม้ดับหมดแล้ว ทั้งครอบครัวจะร่วมทานอาหารที่ไหว้ทั้งหมดนั้นด้วยกัน. ถือว่าเป็นสิริมงคล. นอกจากการเซ่นไหว้ทำนองนี้ ในชีวิตของคนไทย ไม่ว่าจะทำอะไร ผลองการเกิด การหมั้น การแต่งงาน วันเกิด วันตาย จะมีการเลี้ยงพระด้วยเสมอ. คือมีการนิมนต์พระมาสวดในตอนเช้าเป็นการเริ่มพิธีก่อนการทำสิ่งอื่นใด. เสร็จแล้วก็จะเลี้ยงพระ. รับศีลรับพรจากพระท่านก่อน

เมื่อพระท่านกลับไป ทุกคนจึงจะกินเลี้ยงหรือทำกิจการอื่นตามจุดประสงค์ของวันนั้น. ถ้าหากไม่มีการจัดเลี้ยงพระ ก็จะใส่บาตรตอนเช้าตรู่แทน. การเลี้ยงพระหรือใส่บาตรจึงเป็นสิ่งที่ขาดเสียไม่ได้. แต่ละคนพยายามหาอาหารที่ดีที่สุดที่จัดหาได้ตามฐานะของตน. เป็นที่นิยมกันว่า เวลาทำอาหารเลี้ยงพระหรือฉลองพิธีอะไรก็ตาม มักจะเลือกทำอาหารที่มีชื่อเป็นมงคลด้วย เช่น ขนมทองหยิบ ทองหยอด ฝอยทอง (ทองเป็นสัญลักษณ์ของความร่ำรวย) ขนมชั้น(สื่อความหมายของโชคกลางหลายๆอย่าง) หรือ ลาบ (เพราะเสียงตรงกับคำว่า "ลาภ" ซึ่งแปลว่าทรัพย์สินเงินทองหรือโชค) หรือทำอาหารที่มีลักษณะยาวๆเช่น วุ้นเส้น หนี๋ ขนมจีน เพื่อสื่อความหมายของความยาวนานของชีวิต เป็นต้น.

คนไทยชอบกิน, รักการกิน, และรู้จักกินมากแต่ไหนแต่ไร. ถ้าพิจารณาจากรายการอาหารประเภทต่างๆที่หากินได้ในประเทศไทย รวมทั้งเวลาที่คนไทยใช้ในการกินอาหาร(ตั้งแต่ 1-5 ชั่วโมง), ตลอดจนเวลาขายอาหารในเมืองไทยแล้ว เราอาจพูดได้ว่า การกินเป็นพฤติกรรมอันดับหนึ่งและอันดับแรกของคนไทย. จำนวนอาหารสารพัดสารพันแบบใน Thai Cuisine นั้นเป็นที่รู้จักแพร่หลายไปทั่วโลก. และไม่ว่าชนชาติใดภาษาใด มีธรรมเนียมการกินแบบใด ก็สามารถหาอาหารที่ถูกปากเขาได้ในเมืองไทย. อาหารไทยแท้โดยทั่วไป ประกอบด้วยผักต่างๆ เป็นสำคัญ. ผักนี้จะทานกับปลาหรือปลาทอด, กับน้ำพริกแบบต่างๆ. นอกจากผัก น้ำพริก ก็มีเนื้อสัตว์เช่น กุ้ง ปู ปลา (แต่, ตะพาน้ำ) กบ หรือไก่ เป็ด ห่าน นก หรือหมู วัว (บ้าง แต่ไม่มาก) เป็นต้น. ส่วนใหญ่ก็จะทานอาหารสัตว์น้ำมาก ต่อมาจะเป็นอาหารสัตว์ปีก หรือหมูมากกว่าเนื้อวัว เป็นต้น. โดยเฉพาะในช่วงสิบกว่าปีหลังนี้ คนไทยทานเนื้อวัวน้อยลงมาก เพราะเชื่อกันว่า เจ้าแม่กวนอิมไม่โปรดเนื้อสัตว์โดยเฉพาะเนื้อวัว แต่จะโปรดผักผลไม้มากกว่า. ผู้ที่เคารพบูชาเจ้าแม่กวนอิมจึงหยุดกินเนื้อ. การที่คนไทยต้องสนใจเรื่องอาหารที่เจ้าแม่กวนอิมชอบหรือไม่ชอบนั้น ก็เป็นอีกตัวอย่างหนึ่งที่ชี้ให้เห็นถึงความเชื่อของคนไทยดังที่เราได้พูดมาแต่ต้น.

คนไทยชอบชิม, ชอบลองอาหารแปลกๆใหม่ๆ, และชอบลองอาหารร้านใหม่ๆด้วย. นี่เป็นเหตุผลหนึ่งที่ทำให้มีร้านอาหารตั้งใหม่, มีการเนรมิตเมนูใหม่บ่อยๆ ซึ่งจะเรียกลูกค้าได้เสมอ โดยเฉพาะตามเมืองใหญ่ๆ. ในขณะเดียวกัน ร้านอาหารใดที่ทำอาหารขายเพียงอย่างเดียว ถ้า

ทำได้อร่อย ร้านนั้นก็สามารตั้งอยู่รอด ทำรายได้ไปได้เรื่อยๆ. เพราะคนไทยก็ชอบกลับไปทานร้านเดิมๆที่เคยทานและติดใจ. บางทีถ้าร้านย้ายไปไหน ก็จะติดตามไปทานที่ร้านนั้นอยู่เสมอ. นี่ก็เป็นอีกตัวอย่างหนึ่งที่แสดงว่าคนไทยมีความผูกพันกับทุกสิ่งเป็นนิสัย. คนไทยไม่พิถีพิถันเรื่องสภาพร้าน. ความสำคัญของร้านอาหารอยู่ที่รสชาติว่าอร่อยถูกปากมากน้อยแค่ไหน. สถานที่จะใหญ่โตโอโงงหรือไม่, ไม่สำคัญเท่า. จะดูสะอาดมากน้อยแค่ไหนก็ไม่ถือ. ความรักกินของคนไทย ยังทำให้คนไทยมีนิสัยกินพริ้วเพรื่อ, กินได้กินดีตลอดเวลา. นั่นคือ นอกจากอาหารแต่ละมื้อแล้ว ยังมีขนมต่างๆอีกมากมายตั้งแต่เค้กแบบฝรั่ง หรือขนมแบบไทย รวมทั้งพวกผลไม้ ทั้งผลไม้ตากแห้ง ผลไม้แช่อิ่ม ผลไม้สด และยังมีขนมใส่น้ำแข็งใสอีกนับไม่ถ้วนให้เลือกได้. อาหารประเภทขนมที่คนไทยทานกันนอกเวลาอาหาร จะมีรูปแบบและวิธีกินง่าย, เร็วและสะดวก เป็นถ้วยหรือเป็นชิ้น. มีรสชาติทั้งแบบหวาน แบบมันเค็ม แบบเค็มๆ แบบหวานกรอบ แบบเปรี้ยวๆหวานๆเป็นต้น. การจรรยาที่ติดขัดเป็นอันดับหนึ่งของโลก ทำให้คนไทยทานอาหารไม่ค่อยเป็นเวลา จึงเป็นการดีที่จะมีอาหาร มีขนมพกติดตัวในกระเป๋าอยู่เสมอไม่มากนัก

ความรักและสนใจในอาหารการกินยังเห็นได้ชัดเจนในการจัดปรุงและตกแต่งอาหาร. ไทยมีภาคเหนือซึ่งใช้สำหรับอาหารที่มีเอกลักษณ์พิเศษของชาติเราเอง. ซึ่งเริ่มต้นมาจากในพระบรมมหาราชวัง จากความพิถีพิถันในการจัดและเตรียมอาหารสำหรับพระมหากษัตริย์และเจ้านายทั้งหลาย. เป็นที่รู้กันดีในหมู่คนไทยว่า พระมหากษัตริย์ไทยจะทรงโปรดพระแม่เสี หรือพระราชธิดา หรือนางพระสนมที่ทำอาหารเก่งและอร่อยถูกใจพระองค์. มีพระราชนิพนธ์ที่ทรงไว้เกี่ยวกับเรื่องอาหารที่ตกทอดมาให้เราได้รู้และฟัง เช่นพระบาทสมเด็จพระพุทธเลิศหล้านภาลัย ได้ทรงพระราชนิพนธ์กาพย์เห่ชมเครื่องคาวหวาน ไว้อย่างไพเราะเพราะพริ้ง กลายเป็นเอกสารที่สำคัญที่สุดเล่มหนึ่งของการครัวไทย. รัชกาลที่ห้า ก็ทรงโปรดผู้ทำอาหารเก่งๆ และพระองค์เองก็ทรงโปรดการทำอาหารด้วยพระองค์เองมากด้วย. นอกจากนี้พระองค์ชอบเสด็จประพาสออกไปจากพระนคร, ไปต่างจังหวัด, แต่งพระองค์เป็นชาวบ้านสามัญ และจะหยุดพักทำครัวด้วยอาหารและพืชผักที่หาได้ในแต่ละถิ่น. รัชกาลที่หกได้พระราชนิพนธ์กาพย์เห่ชมเครื่องว่าง พรรณนาอาหารชนิดต่างๆไว้มาก. ในวรรณกรรมไทยตั้งแต่ยุคแรก-สุโขทัย

จนถึงยุคปัจจุบัน ยังมีค่านิยมที่มองไว้ว่า “ยอดหญิง” จะต้องมีความรู้เรื่องการบ้านการครัว เรื่องอาหารการกิน ซึ่งจะเป็นสิ่งภูมิใจสามมิได้ตลอดไป. (มีสำนวนไทยว่า “เสน่ห์น้ำมีนาง”, “เสน่ห์ปลายจวัก” เป็นต้น) ในวรรณคดีไทย มักจะเอ่ยถึงเรื่องอาหารการครัวเสมอ เพราะ ครัวและอาหารเป็นสิ่งแสดงคุณสมบัติและคุณภาพชีวิตของแต่ละครอบครัวที่ดีที่สุด.

เมื่อพูดถึงเรื่องกิน ก็ทำให้นึกถึงวิถีกินด้วย. คนไทยใช้ช้อนกับส้อมเป็นหลัก. คนโตะอาหารไทยจะไม่มีมีดวางไว้. ประการแรกเพราะอาหารทุกอย่างหั่นหรือตัดในขนาดพอดีรับประทานแล้ว. ประการที่สองสืบเนื่องไปถึงความเชื่อที่ว่ามีมีดอยู่รอบข้าง. มีที่ไม่ว่าจะแกงปลักมีดเข้าทำร้ายคนถือมีดได้. ความเชื่อนี้ทำให้คนไทยจับมีดโดยหันใบมีดคมๆออกจากตัว. คนไทยจะใช้ตะเกียบซึ่งมาจากอิทธิพลการกินอาหารของจีน เมื่อทานอาหารประเภทก๋วยเตี๋ยว ซึ่งจะมีช้อนสำหรับตักน้ำแกงให้ด้วย. จะไม่ยกถ้วยน้ำซุปขึ้นชด ถือว่าไม่สุภาพ. เหตุผลหนึ่งก็คือว่า ในอาหารไทยแท้ๆ ชามแกงเป็นชามใหญ่ที่ทุกคนตักกินด้วยกันจากชามเดียวกัน. พวกแกงจืดซึ่งมาจากอาหารจีนนั้นจึงจะมีถ้วยน้ำซุปเล็กๆ เป็นถ้วยแบ่งซึ่งเพิ่งมีในปลายศตวรรษที่20นี้เอง. ก่อนหน้านั้นและจนบัดนี้ สำหรับข้าวมีอาหารแต่ละอย่างใส่จานมาอย่างละหนึ่งจานใหญ่. อาหารทุกอย่างสำหรับผู้ร่วมโตะทุกคนทานด้วยกัน. มีทั้งอาหารหนักและอาหารเบาแกงหรือน้ำพริก. ทุกอย่างจัดมาพร้อมกัน, ใครจะเลือกตักอะไรก่อนหลังนั้น ตามแต่ใจ. มารยาทการกินอาหารในสังคมไทยจึงมีความสำคัญมาก เป็นสิ่งที่ครอบครัวและโรงเรียนสอนตั้งแต่เด็กๆ. การต้องร่วมทานอาหารจานเดียวกัน ต้องรู้จักระมัดระวัง ระวังการใจ ระวังแบ่งปัน ระวังเชิญชวนผู้ร่วมโตะ เป็นต้น. โดยทั่วไป ผู้ร่วมโตะจะเชิญผู้อาวุโสที่สุดในวงเป็นผู้เริ่มตักอาหาร หรือไม่กี่เจ้าของบ้านเป็นผู้ตักส่วนที่ดีที่สุดให้ผู้ที่สำคัญที่สุด เป็นต้น. คนไทยตักอาหารให้กันเป็นการแสดงความรักความเอาใจใส่ต่อคนนั้น เช่นแม่ตักให้ลูก หรือลูกตักให้แม่ เพื่อนตักให้กัน เป็นต้น. ในครอบครัวหรือในหมู่เพื่อนสนิท บางทีก็ตักอาหารจากจานของตนเอง อาหารที่ตนยังไม่ได้ทานให้อีกคนหนึ่ง. ไม่ถือว่าเป็นการกินของเหลือจากจานผู้อื่น. ชาวตะวันตกส่วนใหญ่จะไม่ตักอาหารจากจานของตนเองให้ใคร อาหารบนจานที่เหลือจะเททิ้ง. คนไทยมักจะเสียดายของเหลือ เพราะยังมีความเชื่ออีกว่าไม่ควรกินทิ้งกินขว้าง หรือกินเหลือชาติหน้าจะไม่มีการกิน เป็นต้น. วิธีการกินของคนไทยตั้งแต่อดีตจนถึงปัจจุบันอยู่บนรากฐานของ

การร่วมกัน การแบ่งกัน เป็นสิ่งเชื่อมความรู้สึก ความรัก ความสามัคคีกันในหมู่คน. ถ้า นิยมอันนี้ยังมีไปถึงการร่วมกันทำด้วย เช่นถ้าเพื่อนเชิญไปทานข้าวที่บ้านเขา ผู้ได้รับเชิญมัก จะไปก่อนเวลา เพื่อไปช่วยเขาทำ. เป็นเรื่องธรรมดาที่แขกจะเข้าไปในครัวช่วยทำโน่นทำนี่ด้วย กันกับเจ้าของบ้านหรือแม่บ้าน. หรือแม้แต่ช่วยชิมรสหรือช่วยปรุง. เป็นการแสดงน้ำใจและ ความกลมเกลียวกันระหว่างเพื่อนๆ. บางทีแขกก็ทำอาหารไปอย่างหนึ่งเป็นการแบ่งและการ ร่วมกันทำร่วมกันกินแบบหนึ่ง. ในประเทศอื่น น้อยนักที่แม่บ้านจะชอบให้แขกเข้าไปในครัว ด้วย. แขกมักจะนั่งรออยู่ที่ห้องรับแขก, ปล่อยให้แม่บ้านทำไปเป็นการแสดงมารยาทและ ความเชื่อถือว่าแม่บ้านคนเดียวก็มีความสามารถเพียงพอที่จะรับรองแขกได้เต็มที่.

ดิฉันคิดว่า เพื่อนร่วมงาน คนรู้จักกัน ในหมู่คณะใดก็ตาม จะต้องพยายามหาโอกาสทาน ข้าวด้วยกันให้บ่อยที่สุดก็จะดีมาก, เพราะอาหารเป็นสิ่งที่ดีที่สุดที่จะช่วยประสานความรู้สึกที่ แยกแยะหลากหลายของคนไปสู่ความรู้สึกอímอ้อยที่เป็นอันหนึ่งอันเดียวกัน, ซึ่งนำไปสู่ความ เกรงใจต่อกัน สร้างน้ำใจ และผลักดันคนให้ร่วมมือช่วยเหลือกัน. ในสมัยก่อนการทำบุญทำ ขวัญเลี้ยงฉลองร่วมกันในหมู่บ้าน สร้างความสามัคคีกลมเกลียวกันมาแล้วในสังคมไทย. จึง น่าจะเป็นสิ่งที่เชื่อมความสัมพันธ์กันได้อีกในสมัยนี้. ความทรงจำของปากของรสชาติอาหาร, เป็นความทรงจำของประสาทสัมผัส(หนึ่งในห้า)ที่จะอยู่ในจิตใต้สำนึกตลอดชีวิต ยิ่งไปกว่า ความทรงจำจากวัตถุ, จากภาพถ่าย, หรือจากของที่ระลึกใดๆ, เพราะวัตถุเหล่านี้เป็นเพียงสิ่ง เตือนให้สมองกลับไปยังข้อมูลเดิมที่เกี่ยวข้องกับวัตถุนั้นๆเท่านั้น. เช่นทำให้เราคิดขึ้นได้ว่า เราได้วัตถุชิ้นนั้นจากไหน ใครให้เป็นต้น. แต่ความทรงจำในสิ่งอ้อยๆที่เคยทานมาแล้วนั้น จะให้ความอímเอิบใจแก่เราได้ทุกครั้งที่เราลิ้มถึง, เหมือนความไพเราะของดนตรี, เหมือนภาพ จิตรกรรมที่ประทับใจเรา. ในภาษาตะวันตก, ความรู้สึกซาบซึ้งอímเอิบในศิลปะ จึงเปรียบกับ ความอ้อยของอาหาร. เช่นคำว่า delicious จะใช้กับความรู้สึกของอารมณ์อันสุนทรีย์ทุก ประเภท. ในภาษาไทย คำว่า "อ้อย" คำว่า "ความอímเอิบ" ก็เช่นกันสื่อทุกอย่างที่ดีที่พิเศษ. ประสบการณ์ความอ้อยในการกิน จะเป็นพื้นฐานไปสู่ความเข้าใจหรือประสบการณ์แขนงอื่น ได้ง่ายเพราะเป็นประสบการณ์ที่ทุกคนเคยมี, ไม่ว่าจะเป็นคนชาติใดภาษาใด, ไม่ว่าจะกินอะไร เป็นอาหาร.

ความรักกันคือการรักชีวิต. คือความต้องการที่จะยึดชีวิตออกไปๆ, ไม่ให้มีการตายตามกฎแห่งธรรมชาติ. และความต้องการนี้ทำให้คนหวังพึ่งสิ่งที่เหนือธรรมชาติ, จึงเป็นต้นกำเนิดของความเชื่อของศรัทธาต่างๆ.

ดิฉันคิดว่าตราบไตที่คนมีศรัทธามีความเชื่อในศาสนาใดก็ตาม, ตราบนั้นก็จะมีโอกาสให้คนมาร่วมนั่งทานอาหารด้วยกัน ร่วมกันอวย เป็นสายใยเชื่อมกัน, ตราบนั้นก็จะมียาสมุนไพร, มีผู้ยื่นมือให้ความช่วยเหลือแก่กัน, และตราบนั้นมนุษยชาติก็ยังมีความหวัง. หลายครั้งหลายคราในยุธิปไตยที่กำลังจะสิ้นสุดลงนี้, สงครามและภัยธรรมชาติร้ายแรงต่างๆ ได้กลายเป็นสิ่งรวมผู้คนให้ใกล้ชิดกันเพราะ**ร่วมทุกข์**เดียวกัน. นักคิดนักปรัชญากล่าวไว้แล้วในอดีตแต่ละยุคว่า สิ่งเลวร้ายทั้งหลายนำไปสู่สิ่งที่ดีงามได้เสมอและเป็นหนทางสู่การ**ร่วมสุข**ของมนุษยชาติในเวลาต่อมา.

タイ人の習性あれこれ：仏教と食事について

国際文化学部 チョーティロット・K

国際文化学部 飯島明子

本日はタイの文化の中で、タイ人の性格を形づくっている特色についてお話しします。

まず、最も重要な特色は仏教です。この仏教はスリランカを経て伝わった上座仏教（南伝仏教）が主で、大乘仏教と異なり、僧俗の別が厳然としています。

13世紀のスコタイ時代に遡るタイ人の歴史では、当時から既に仏教が信仰され、人々は寺院に通い、「タンブン」（＝徳を積む行為）をしていたという記録が残っています。ポームアン（「ポー」は父の意）と呼ばれた国の指導者は、仏教道徳を民衆の手本として用い、それが法律の基礎となりました。人口が増え、国家領域が拡大すると、ポームアンの地位が国王へと変化しました。国王は国家を治め、教育や地位や行為や道徳でもって社会を支えました。従って、王はタンマラーチャー（仏法の王）であると考えられました。王が道徳ある善人であれば、国は平穏であるという考えです。この考えでは、王は世俗の天（神）であるに過ぎません。つまり普通の人間が神のように崇められるのであって、ヒンドゥー教の考えやエジプトのファラオのように神そのものと考えられたわけではありません。国のために多大の貢献をした王は人々から愛され、尊敬されます。そして死後には、タイ国を護る“シャムの神”となりました。すべての国王が“シャムの神”となられるわけではなく、その時代の最良の王に限られました。ラーマ5世王（在位 1868-1910）は今日までずっと尊崇されていますが、それは王がご存命中はタンマラーチャーであられ、亡くなった後に“シャムの神”となられたからです。

仏教は社会のまとまりのために良い価値観を植え付け、他の何よりもタイ人を感化しています。例えば、階級や出自による差別を無くし、平等であるように説いていること。

そこで、タイ人に関わるすべての事が何かしら仏教に由来することを知っていただくために、タイ人の性格の幾つかを挙げましょう。

①タイ人は因果応報を強く信じて、タンブン行為や親切を熱心に行います。

タイ人のタンブンには三つの目的があります。（a）この世と来世における幸福と繁栄を得るために自分自身のブンを積む、つまり、自分の幸福を買うための一種の投資のようなタンブン。幸福はこの世で得られる場合もあれば、来世の場合もあります。（b）先祖や知人（生きている人でも亡くなった人でも）に善果を捧げるためのタンブン。これは贈り物をする、あるいはその人に幸福を伝えるのと同様です。（c）遺恨を持ち合う人に捧げるために、精霊にお供えをしたり、呪いを解くためのタンブン。これは過去の世界で誰かに対して犯した罪を認め、赦しを請うことです。前世の業が軽減され、その人とまた問題が起こることのないように願ってのことです。

タンブンとしてよく行われるのは、毎朝托鉢に来る僧の鉢に食物を献じることの他に、鳥や魚やカメや牛を逃がす放つ行為や、仏像を鑄造する、寺院を建立したり修復する、僧侶に食物代や薬代をお布施する、また病気の人は同じ病いで苦しむ貧しい人の治療費としてお金を寄付する、などが挙げられます。

仏教の思想では、善業や悪業は消し去ることができません。良い事をした人は良い結果を得、悪いことをすれば悪い結果を得る。タイ語の決まり文句では、“ブン・タム・カム・テン”つまり人生における盛衰など万事、前世でなした善業悪業のせい、持って生まれた運勢次第だということになります。この考え方は、タイ語やタイ社会の中に明瞭に見られます。運がいい人は、“ペン・コン・ミー・ブン”つまり「ブンのある人」、又は“ブン・ラック・サック・ヤイ”つまり「福分重く、権勢大」と言います。運が悪ければ、“カム・ターム・サノーン”つまり「因果応報」です。これらの慣用語はタイ人の頭にしみついて、現在がどうであれ、前世や今生でかつて悪い事してい

れば、その報いは必ず受けねばならないと考えます。このように信ずることは、過ちを犯すのを恐れ、様々な悪事を避けるよう努力する助けになります。しかし格差の大きい今日の社会で、この思想は貧乏に生まれついたのは業のせいだと、貧しい人々やチャンスに恵まれない人々の救済に無関心な支配階級の言いぬけに用いられる可能性もあります。一方貧しい人々は、俯いて自分の境遇を受け入れ、運命に導かれるままとなります。

因果応報思想は、タイ人の心の奥深くに恐れのがちが潜んでいることを示しています。不幸への恐れ、幸福を失うことへの恐れ、古い業がもたらす災厄に対する恐れです。恐れを抱くのは、一方で人生を愛する気持ちが強いからに他なりません。仏教がタイ国で非常に盛んなのは、一面ではタイ人が人一倍恐がり、そしてこの世の幸福への執着が誰よりも強いことの表れです。それはタイ人が物を惜しみ、一向に捨てないことにも示されます。古い物でもとっておき、家中がいっぱいになります。これは身体以外の財物に対する執着です。このような執着は死後にも続きます。死者の霊が親族の夢に現れて、生前使っていたあれこれの物が欲しいと言う話はよくあります。夢を見た人は目覚めると、その物を見つけて、死者に捧げます。言われた通りにしないと死者は悲しんで、又たびたび夢に現れます。

②タイ人は仏像、僧侶、尊像（塑像や写真等）、さまざまな霊や神を祀る祠などを崇め奉ります。

神聖なシンボル、例えば法輪、仏足跡、護符やお守り、さらには菩提樹、ガジュマルなどの大樹、シロアリ塚も礼拝の対象になります。この手の信仰はどの国にもあるものですが、タイ人の間ではとても盛んで、馬鹿げたほどです。遂には、タイ人の意識が仏教よりもむしろ呪術に支配されているようにさえ見えます。これこそ恐れのがち、道理を求める理性に欠けるからで、そこで超自然の物にすがって助けを求めるのです。仏教の教えを熟考し、真に理解してブツダを崇拝する人は少なく、多くは慣習やさまざまな僧侶の行う儀式に従って行動していれば、それで仏教徒として十分だと考えています。僧侶を崇拝するのは、神聖なものが身にまわりついて自分が幸福になるためであったり、望むような奇跡が起こるのを願ってのことです。運勢を予め教えてもらいたい、吉祥吉日を知りたい、僧侶に聖水をかけてもらいたいからだったりもします。

こうした信心のために、タイ人は易者や占い師をよく訪ねます。占い師には僧侶も、占星術を習った俗人もいます。彼らは誕生日や時間に従ってホロスコープを描き、生まれを支配する惑星の軌道の影響によって、その人の運勢を説明してくれます。ここ10年ほど前からは、中国の風水学が流行ってきました。簡単に言えば、タイでは易者商売はかなり儲かる仕事なのです。特に現在のタイの経済不況下ではそうで、インターネットで最もアクセス回数の多いホームページの第三位までが、占いと運勢の予測に関するものだという最新の統計があります。運とか前兆とかを信じるタイ人は、霊験あらたかだという評判の仏像があれば、幾ら高価でも、喜んでお金を投じて買い（タイ人は「買う」とは言わず、「借りる」と表現します）、自分の物にして拝みます。こうした習性こそが仏教ビジネスを生み、成り立たせる源です。宣伝文句ではこれも一種の「タンブン」ということになりませんが、未だに形骸に惑い、物質主義にひどく囚われているタイ人の価値観を示しています。

③仏教はタイ人に中道に立つよう、他人の権利や信仰を尊重するように教えています。これはタイの歴史上明らかです。

17世紀に西洋人がインドシナ半島へやって来た時、彼らは貿易上の利益だけでなく、キリスト教の布教も望みました。当時のタイの王は宣教師たちが布教することを容認し、信仰の自由を認めました。その結果フランス王ルイ14世でさえタイの王の寛大さを讃え、外交使節を派遣して、フランスとタイの間に友好関係が築かれました。宗教や信仰の面における寛大さにより、タイは西洋人との軋轢を軽減することができ、西洋人は力を行使しませんでした。このことが、周辺諸国がみなヨーロッパ列強の植民地となった中で、タイが西洋の植民地とならなかった理由の一つです。信仰に対する寛大さは今日までずっと存続し、法律により、誰もがいかなる宗教でも信仰する権利を有しています。

宗教信仰に対する寛大さがあるために、タイ人はさまざまな宗教に由来する神聖な物を同時に一緒に崇めることができます。仏教は他の神々を礼拝することをあからさまに禁じてはいないからです。タイ人はヒンドゥー教の大梵天を拝み、中国式仏教の観音様を拝み、日本の神道の神、あるいは天理教の親神さまをも拝みます。これらに加えて、樹齢を重ねた大木などに宿る守護神も崇拝します。タイ人が祈ったり、祝福したりする時には次のように唱えます。「世界中のすべての霊験あらたかなる物に願い奉る、どうか助けたまえ・・・」

前述のように、タイ人がタンブンとして日常的に行うのは、托鉢する僧侶に食物を捧げる行為です。僧侶は仏教の護持者であり、普通の人間より上位にある、高い美徳と知恵を有した明かりであり、仏教徒全員の心の導き手であると考えられています。したがって僧侶に食物を捧げることは、タンブンであると同時に布施の意味を持つ善行です。僧侶の鉢に捧げる食物には、一生懸命に良い物を選びます。と言うのも、タイ人はこの行為によって、この世でも来世でも、自分が豊かな食物に恵まれると信じているからなのです。言うなれば、自分の来世のために、美味しい食べ物を貯蓄するようなものです。これは仏教のもともとの教えの中にはない俗信で、食を愛するというタイ人の性質に関わってくる、明白な例です。タイ人は食べることに、毎食、毎日考えるだけでなく、来世の生活に関してまで考えているのです。

信仰心と食事の愛好。これこそがタイ人の最も際立つ二つの特性でしょう。そこでタイ人は、僧侶や様々な神、さらにはピーと総称される精霊や祖先の霊までを含むものたちに、食物をお供えとして捧げます。

タイ人の生活においては何をすることも、例えば出生の祝い、婚約、結婚、誕生日、命日と、いつも僧侶を招いて食物を献じてもてなします。朝、僧侶を招いてお経をあげてもらうのが、儀式の始まり。それが済むと、僧侶に食事を献じます。僧侶が帰る時には祝福を受け、それから全員が食事をし、当日の目的に従って行事を行います。僧侶を招かない場合は、かわりに早朝の托鉢の時に食物を捧げます。このどちらかは絶対に欠かせません。誰もが自分自身の分相応に最良の食事を用意しようと努めます。

タイ人は食べるのが好きで、常に食に意を用いています。タイで食べられる食物の種類、タイ人が食事に使う時間、さらに食物が売られている時間などを考え合わせると、食べることはタイ人にとって真っ先に来る第一番の行為だと言えるでしょう。1970年代半ばに首相を務めたククリット・プラモートという人は有数の食通で、料理の本やテキストをたくさん書きました。彼は、次のように言いました。「タイ料理にはいろいろあって、毎日違う物を食べて、死ぬまで同じ物を食べずにすむ。それでもタイ料理のメニューは尽きない。」これは一寸大げさかも知れませんが、その意味は、もし毎日違う物を食べたいと思ったら、実際に可能だということです。タイでは殆ど四六時中食べ物を売っています。どんな深夜でも、また早朝夜明けの何時間前であろうと、いつでも何か食べ物を見つけることができます。

日本料理は盛りつけた膳の美的な面において有名です。日本料理の盆はまるで水彩画のようで目をひきつけ、色彩の美しさに心を奪われます。タイ料理の評判は、おいしく味のある料理だというもので、香りも味も、食べる者を別の世界、刺激的でエキゾチックな世界、新奇な物に挑戦する冒険の世界へ導きます。爆発的に、一挙に心に焼き付く世界です（特に、もし外国人が初めて辛い味に出会った時は）。要するに、日本料理を味わった外国人の印象に残るのは美しいイメージであり、タイ料理を味わって残るのは、口中から一生離れない料理の味でしょう。両者の特色はまるで違います。それは環境や、社会や、宗教信仰や、古来育まれてきた価値観の違いによる結果です。

タイ料理では一般に、種々の野菜が重要な要素です。野菜はナムブリックと呼ばれるペースト状の辛いソースと一緒に食べます。先のククリット氏は、ナムブリックはタイ料理の基本的なおかずでタイ文化の一種であり、タイ人ならナムブリックを知り、食べることができなければならぬと言っています。ナムブリックは種類が多く、一年中毎日違うのが食べられるとも書きました

た。野菜とナムプリックの他には、エビ、カニ、魚、カエル、鶏、アヒル、ガチョウ、鳥類、またブタ、牛などがあります。ブタが牛よりも多く食べられ、特にここ10年ほどの間にタイ人の牛肉消費量が減っています。これは中国人の信仰の影響を受けて、観音様を信仰するタイ人が牛を食べるのを避けた結果です。観音様は動物の肉、特に牛肉は好まれず、野菜や果物を召し上がったと信じられているからです。タイ人が観音様の食事に興味をもつのも、前にお話したような、タイ人の信心の性格を示します。

タイ料理はたいいてい濃い味付けです。塩味と辛味が基本で、これが生野菜の香りやいろいろな香辛料とマッチしています。次に来るのがサラダ料理の酸味で、それにある種の料理では若干の甘味を加わります。とはいえ、味付けの薄い料理も、野菜炒め、チャーハン、海産物の蒸し物など、お好み次第です。

タイでは各地に独特の味と特徴をもった料理があります。タイ人はどの地方の料理でもおいしくいただきますが、これは一種の美德と考えられます。あちこちの土地の料理を食べたい試したいと思うのは、その土地のものの見方や精神へ近づく扉を押すのと同じです。なぜならそれぞれの土地の食と調理法は、人々の歴史であり、風土の特徴、人々の性格や心情を語っているのですから。私たちが土地の心情に触れたいと思えば、その土地の料理を食べてみるのが最良の手っ取り早い方法です。

タイ人は新奇な料理を試すのが好きで、新しい店で食べてみるのも好みます。おかげで新しい食堂、新しいメニューが始終お目見えし、特に大都市ではお客を呼んでいます。一方、メニューは少なくても、おいしい店はやっていけます。タイ人は気に入った店へ又行くのも好きなのです。店が移転しても、新しい場所へ通います。これもまた、タイ人が何事にも執着する性格であることを示します。店の外観にはあまりこだわりません。重要なのは、味がいかにおいしく口にあうかどうかです。店の規模も、豪華であろうがなかろうが、味に比べれば二の次です。清潔な感じが否かも気にしません。タイにいらした方は、一見ぱっとしない小さな食堂がなぜか満員だったり、あるいはバンコクの道端の食堂が、空気が悪かろうが埃だらけだろうが気にすることもなく、食事をする人でいっぱいなのをご覧になるでしょう。それは、その店の料理がおいしいからです。

タイ人は誰かと待ち合わせする時には食堂を出会いの場所に選び、一緒に食事しながら、何時間でも話を続けます。これはタイ社会における他のいかなる楽しみにもまさる幸福です。食を愛し、食を知ることにかけては、貧富に関係はありません。

食べ物と食事への愛好は、調理法や料理の盛りつけ、独特の食器にも見られます。それは王宮内から、国王と王族たちのための食事を精魂こめて用意することから始まりました。タイの国王は料理が上手な后や王女や側室たちを寵愛されました。料理について国王が書かれた著作も伝わっています。例えば18世紀末のラーマ2世王は、「料理と菓子を愛でる舟歌」を著されましたが、この詩歌はタイ料理に関する重要な資料の一つです。この中で語られるさまざまな料理の特徴がそれぞれ、女性に結びつけられます。料理が国王の寵愛する女性の性質を思い起こさせるのです。ラーマ5世も料理の上手な女性を愛され、ご自身で料理することも大変好まれました。都を出て地方へ旅される時には普通の人の格好をして出かけられ、その土地で手に入る食物を用いて調理されました。タイ文学の中には、初期から現在に至るまで、女性の鑑は家事や料理や食事に通じていること、それが夫の心を生涯つなぎ止めるという価値観が現れています。“女房の腕、さじ加減一つの魅力”という慣用句があります。女房が匙加減一つで料理を美味しくしてくれる魅力を夫は愛し続けるものだと言った意味です。

食事について語るなら、食べ方も問題です。現在のタイ人は普通スプーンとフォークを使います。テーブルの上にナイフはありません。その理由の第一は、どの料理も食べやすい大きさに切ったり刻んだりしてあること。第二は、身のまわりに精霊がいるという信心からきています。悪い精霊がナイフを持って危害を加えてくるかも知れないのです。中国料理からの影響を受けて、汁そばを食

べる時には箸を使いますが、汁を掬うためのスプーンも添えられます。

器を持ち上げてスープを飲むのは上品でないと考えられています。その理由は、本来のタイ料理では汁は大きい器に入れ、全員が一つの器から掬って食べるからです。小さな器に取り分ける習慣はごく最近生まれたものです。以前には、そして今でも、テーブルにはそれぞれの料理を入れた大きい皿が一つずつ置かれ、すべての料理をテーブルを囲む人全員と一緒に食べるのです。重い料理も軽い料理も、スープもナムプリックも、すべてが一度に配膳され、誰でも食べたい物から掬って食べて構いません。西洋料理のように種類食べ終えたら、次の料理にかかるというのとは違います。

タイ社会では食事のマナーは重要で、家庭や学校で小さい時から教えます。「誰かの性格を知りたかったら、一緒に食事をしてみればわかる」と習います。それというのも、一つの皿の料理と一緒に食べるからです。我を抑えて遠慮し、分け合い、相手に誘いかけたりすることを知らねばなりません。例えば揚げ魚がある時、誰が魚のどの部分を食べるか、誰が真っ先に掬うか、それとも他の人にとってあげるか、こういうことが人の心の中を表します。誰でも一番おいしい部分をたくさん食べたいものですが、他の人も同じですから、そこで気持ちを抑え、分け合い、遠慮することを学ぶのです。一般にテーブルを囲む人々は最年長の人に先に勧めるか、さもなければ主人が一番良い部分を一番重要な客にとってあげます。タイ人にとって、料理をとってあげることは、その人への愛情の表現です。母が子に、子が母に、友人同士が互いにとってあげます。家族や親しい友人同士の間では自分の皿から渡し、これを他の人の残りを食べるのだとは考えません。また、食べ残しをすると来世で食べはぐれるという迷信があるために、皿にある料理は残さないのが普通です。これは特に他人の家でごちそうになったときの礼儀でもあります。客が少食だったり、残したりすると、主人に失礼にあたります。昔から今に至るタイ人の食事法は、共にいて、分け合うという基盤の上にあり、感情や愛情を結び合わせるものなのです。

このような価値観は、共に料理することにもつながります。友達の家へ招かれた客はたいてい時間前に行って、調理を手伝います。客が主人や主婦とともに台所に入るのは普通のことです。味見や味付けを手伝うことさえあり、これが心のこもった表現であり、友人同士の和合なのです。他の国々では、主婦が好んで客に台所へ入らせることは殆どないでしょう。客は普通客間に座って待ち、主婦に用意させるのが礼儀で、主婦一人で客を接待するのに十分な能力を持っていると信じられています。

以上述べたような食事の心理学からして、他人と一緒に食事することは、タイ人にとって容易なことでも些細なことでもありません。タイ人にとって食は、他の国の方々の思い及ばないほどに大切なことなのです。誰もがお金を得ることを専ら考え、生活費が高騰した時代にあっては、タイ社会においても一緒に食事することが少なくなっていくかもしれません。しかし職場の同僚やどんな集団での知り合いでも、一緒に食事をする機会を多く持つのはとても良いことです。食事は人間のばらばらに離れた気持ちをつないで、一つになる満足感を生む最良の手段だからです。それが互いに対する遠慮の気持ちや思いやりを育み、協力して助け合うきっかけとなります。昔は村の中で集まって、タンブンをし、もてなし、祝い、タイ社会に団結と和合を創りだしたので、現代の世にあってもまた、人間関係を結びつけるものとなるでしょう。

口に残った料理の味は五感の一つに触れる記憶で、物の記憶、記念の品の思い出よりも強く、無意識のうちに生涯残るものです。物は記憶のきっかけに過ぎず、脳に命じてその物に関するデータ、例えばそれを誰がくれたのかといったことを思い出させるのです。けれどもかつて食べたおいしい物の記憶は、思い出すたび、音楽の美しい響きや、感銘を受けた絵画のように、私たちに満足感を引き起こします。

西洋の言語では、芸術の感動や満足を食物のおいしさにたとえます。例えば、デリシャスという言葉はあらゆる種類の美的な感覚に用いられます。タイ語の「アローイ = おいしい」、「イムウープ

= 満腹」という言葉も同様に、特別にすばらしいものなら何でも伝えます。おいしい食事の経験は、誰でも経験したことがあるものですから、他の分野の理解や経験へとつながる基礎となります。食を愛するのは生命を愛すること、命を長らえたいという欲求です。この欲求のために、人は超自然のモノにより所を求め、それがさまざまな信仰、信心が生まれる基となります。人間が何の宗教であれ、信仰や信心を持ち続ける限り、人間が共に座して食事し、おいしさを共にして結び合う、そういうことがある限り、自ら志願して助けの手をさしのべ合う人がいるでしょう。そしてそういう人たちがいる限り、人類にはまだ希望があると言えるのではないのでしょうか。



天理大学公開講座（天理市）の統計資料
受講後のアンケートから

◎受講者

回数	受講者数	アンケート		10代	20代	30代	40代	50代	60代	70代～	天理市内	天理市外
		回答	無回答									
第1回	250	150	100	1	8	4	11	30	64	32	53	97
第2回	16	9	7		1	2	1	2	2		7	1
第3回	97	56	41		2	1	6	8	18	19	32	23
第4回	48	29	19	4	9	4	6	4	2		16	13
第5回	46	31	15		10	3	3	4	8	2	15	16
第6回	54	34	20			2	7	7	16	2	20	12
第7回	26	16	10			1	4	4	4	2	11	5
第8回	43	35	8		2	5	10	7	7	4	21	14
第9回	25	18	7		1		3	1	9	4	14	4
第10回	53	45	8	3	10	1	6	7	9	6	34	11
第11回	73	10	63				2	1	6		8	1
第12回	30	20	10		1		1	8	6	3	11	9
第13回	47	32	15	1	7	4	5	7	6	2	17	15
合計	808	485	323	9	51	27	65	90	157	76	259	221
率		60.0%	40.0%	2.0%	10.7%	5.7%	13.7%	18.9%	33.1%	16.0%	54.0%	46.0%

講義内容について（回答数 485）

大変おもしろかった	342	70.5%
まあ、おもしろかった	94	19.4%
あまりおもしろくなかった	9	1.9%
つまらなかった	1	0.2%
無回答	39	8.0%

次回の参加意志について（回答数 485）

ぜひ参加したい	254	52.4%
できれば参加したい	120	24.7%
テーマによっては参加する	100	20.6%
参加したくない	0	0%
無回答	11	2.3%

今後のテーマの希望について

（複数回答可、回答数 1,019）

歴史	289	59.6%
国際文化	150	30.9%
日本文学	121	24.9%
宗教	94	19.4%
芸術	89	18.4%
環境	80	16.5%
福祉	57	11.8%
スポーツ・健康	48	9.9%
教育	42	8.7%
外国文学	35	7.2%
⑪その他	14	2.9%

（比率は 485 に対するもの）

あ と が き

遂に種子は蒔かれました。

本学は平成4年に公開講座委員会を設置し、その総力を結集して、大阪市や天理市において公開講座を展開してまいりました。この辺りで、7年間におよぶ展開事業の成果を一本にまとめ、その全貌の一端を後世に遺し、語り継いでゆくよすがにいたしたいというのが、本書の編集に携わったものたち全員の切実な念願でありました。

いくつかの施設、多くの方々から賜ったご協力にも言及しておかねばなりません。すなわち、公開講座の会場を快く提供して下さった大阪・毎日文化センターと天理市文化センター、本講座への援助を惜しまれなかった天理教道友社と天理市教育委員会、そして、本講座を担当していただいた延べ約250名におよぶ本学教授陣各位、さらに、創刊号発刊の辞を執筆していただいた橋本武人・天理大学学長、これら関係機関、関係者のみなさまのご好意とご支援とご高配に対し、衷心より厚くお礼申し上げます。

蒔かれた一粒の種子がやがて見上げるばかりの大樹に成長し、その大樹が、毎年、風味豊かな果実をたわわに実らせてくれることを、読者のみなさまとともに、祈念いたしたく存じます。

1999年9月

天理大学公開講座委員会
委員長 山本 徹

天理大学公開講座

(創刊号)

1999年9月30日発行

編集発行 天理大学公開講座委員会

印刷 天理時報社
